

天理大学公開講座

第9号

2015年度／2016年度



TENRI UNIVERSITY

目 次

平成27年度

天理大学公開講座（共催：天理市教育委員会）

第1回 賢い消費者になるために	谷口 直子	3
第2回 ご存知ですか？医療ソーシャルワーカー	鳥巢 佳子	5
第3回 山田風太郎『人間臨終図鑑』を読む	堀内 みどり	6
第4回 環境ボランティアに参加しませんか —10年以上にわたる布留川清掃から見えてきたこと—	佐藤 孝則	7
第5回 江戸時代における民衆信仰の興隆と変容	神田 秀雄	9

地域研究への招待（共催：奈良新聞社）

第1回 アメリカ人とは誰のことか？ —揺らぐ米国市民の境界—	山倉 明弘	10
第2回 “先住民” の誕生：先住ハワイ人の事例を中心に	井上 昭洋	11
第3回 歴史のなかの“ハイブリット”時代 —戦国・織豊・江戸初期の世界と日本—	藤田 明良	12
第4回 越境する芸術／食文化 ：英国ルネサンスのデザート用木皿にみる移入・伝播の過程	山本 真司	14

「大和学」への招待（共催：奈良新聞社）

統一テーマ：大和の歴史と人物

第1回 御所市茅原の大トンドと役行者伝説	齊藤 純	15
第2回 阿礼と安万侶 —古事記編纂者の近代—	黒岩 康博	16
第3回 叡尊と忍性 —鎌倉時代の仏教改革者—	吉井 敏幸	17
第4回 坂本龍馬があこがれた？戦争 —天誅組の乱を見なおす	中村 武生	19
第5回 関野貞 —奈良の文化財を守った巨星—	橋本 英将	21

教職員のための夏の公開講座（後援：奈良県教育委員会）

柿本人麻呂 —表現と方法—	川島 二郎	23
---------------	-------	----

目 次

平成28年度

天理大学公開講座（共催：天理市教育委員会、後援：奈良新聞社）

ことばと文学

第1回 「～のだ」の表現について	吉田 茂晃 24
第2回 大和の説話・伝説	佐藤 愛弓 25
第3回 『源氏物語』と音楽	仁尾 雅信 27
「大和学」への招待	
第1回 江戸時代の奈良町と名産	谷山 正道 28
第2回 鹿の角切り始まる！	幡鎌 一弘 31
第3回 ぜんぶ、茶粥のせい	黒岩 康博 33

外国語への招待（共催：奈良新聞社）

第1回 スペイン語とポルトガル語を通して見る日本語	矢持 善和、野中 モニカ、 J. ロペス 34
第2回 平成蘭学事始 — ことばを通して見えてくるオランダ社会 —	小林 早百合 36
第3回 ウクライナ語への招待	中止（講師急病により）
第4回 世界に広がる中国語 — 「漢語橋」世界大学生中国語コンテストを事例として—	今井 淳雄 37

教職員のための夏の公開講座（後援：奈良県教育委員会）

「動機づけ」を高めるための実践的な英語指導法について考える	櫛本 崇恵 39
-------------------------------	--------------------

平成27年度～平成28年度

一般社会人のためのスポーツ実技講座

バドミントン 初中級編	中谷 敏昭 41
-------------	--------------------

第 1 回 平成 27 年 5 月 9 日 賢い消費者になるために

人間学部人間関係学科 講師 谷口 直子



1. 消費者とは誰のことか

貨幣経済が発達した現代の経済社会では、誰もが消費者である。成熟社会であるわが国において、貨幣を使用せずに日々の生活のすべてを賄う人は、ほとんどないだろう。

私たちは、1次産業（農業・漁業など）、2次産業（鉱工業など）を通じて生産された「商品」を貨幣によって交換し、生活に役立てる。また、3次産業（サービス業など）の発達により、生活に潤いを得ている。つまり、私たちのライフスタイル自体が高度な消費によって支えられ、わが国に住む大半（ほとんど）の人が消費者である。このような社会を「高度消費社会」または「大衆消費社会」と呼んでいる。

2. わが国の消費者問題と物言わぬ消費者

消費者問題とは、消費者と事業者の間に生じたトラブルをいう。わが国は、消費社会の発展と共にさまざまな消費者問題を経験している。

たとえば、終戦後の物資が少ない時代では、消費者も選択の機会がなく、品質が消費者問題となった。ヒ素が混入した粉ミルクを飲んだ乳幼児が被害を受けた「森永ヒ素入り粉ミルク事件（1955年）」などの、不良品というには重大すぎる製造物責任に関わる事件や、妊婦が服用した睡眠薬が原因で胎児に異常がおこった「サリドマイド中毒事件（1960年）」のように深刻な被害被害が数多く発生している。また、甘味料が添加されているにもかかわらず全糖と表示された「粉ジュースの追放運動（1956年）」など、表示上の問題が起こっている。戦後、わが国で起こったさまざまな消費者問題が添加物の使用などの品質問題であった頃には、消費者運動が盛んに起り、わが国の消費者は「物言う消費者」であった。

1970年代に入ると消費者問題の軸は訪問販売などによる契約トラブルに移行することになるが、この移行に準じるように、消費者問題は集団的な問題から個人的な問題へと変化する。その後、「雪印集団食中毒事件（2000年）」や食品偽装などが起こっても、わが国の消費者はおとなしい。「人の噂も75日」のこことわざのように、最初は買い控えなどが起こるが、そのうち何事もなかったように購入するようになり、決して不買運動などの意思表示にはつながらない。上述したような消費者問題の個人化が進行したことで、豊かな消費環境が、わが国の現代消費者像を「物言わぬ消費者」だという一因ではないかと考えている。

消費者問題は経済社会の発展とともに変化していく、いわば社会の成熟度の指標である。

2008年ごろに中華人民共和国で発覚した「メラミン混入粉ミルク事件」や輸入された冷凍餃子に農薬が混入して日本で被害が拡大した「冷凍餃子中毒事件」を見ても、日本の戦後混乱期の消費者問題に似ている。言うならば、中華人民共和国のこの時期（2008年ごろ）は、日本の戦後、成長期と同様の社会の成熟度であると言ってもよいだろう。そして、「冷凍餃子中毒事件」のように、国際社会のグローバル化、ボーダレス化の影響で、他国の消費者問題に巻き込まれるリスクの増加が、新たな消費者問題のかたちであろうことを付言しておきたい。

3. 消費者市民社会

最初に書いたように「現代社会では誰もが消費者」である。この大衆消費社会において、消費者である自覚を持ち、消費している個人はどのくらいいるだろうか。おおよそ、日々の消費に慣れて、利便性や価格を消費の基準としていないだろうか。

消費者には6つの権利がある。①安全の確保 ②選択機会の確保 ③必要な情報の提供
④教育機会の確保 ⑤消費者意見の反映 ⑥消費者被害の救済 である。

いま、提唱したい「消費者市民社会」とは、消費者が自ら持つ6つの権利を認識し、自らの消費行動が社会・経済・環境に及ぼす影響を考えながら商品・サービスを選択して、使用から廃棄に至るまでに責任を持ち、消費者自身が消費による社会の発展と改善について考えながら消費者主導型社会を構築しようとする、消費者主権社会のことである。

4. 賢い消費者になるために

賢い消費者とは、どのような消費者かと考えるときに、次の5点をあげたい。

- ①自ら学び、豊富な消費に関わる知識と情報を得た人
- ②自己的利欲にとらわれることなく、広い視野を持った人
- ③事業者に対してコミュニケーション能力を持つ人
- ④自己の理念を論理的に表現できる説得力のある人
- ⑤常時、ぶれない行動力があり、信用がおける人

つまり、賢い消費者とは、消費者が社会のステークホルダー（利害関係者）であるという役割を理解し、消費市民社会の一員としての自覚を持って消費し、持続可能な社会を構築するために行動できる消費者であるといえる。このような消費者が増えることで、私たちの社会は真の成熟社会となることができるのである。

第2回 平成27年5月16日

ご存知ですか？医療ソーシャルワーカー

人間学部人間関係学科 准教授 鳥巢 佳子



身近な社会福祉の専門家・ソーシャルワーカー

私たちは、日々の生活で自分や家族や周囲の人々が病気になるという経験をします。インフルエンザで数日間熱のため寝込んでしまった、親が脳梗塞で倒れて長期入院することになった、同窓会に出席したら旧友ががんで昨年亡くなったことを知った、などさまざまな経験があります。病気には、治療によって完全に治るものと、完治はできないが治療によってこれまでどおりの生活を営むことができるものや、重い症状や障害などでこれまでの生活が困難になるものなどがあります。いずれにしても、私たちにとって病気はいつどんな形で経験するか予測ができません。

ものの、生活の一部として誰もが経験することです。

もし、あなたやあなたの大切な人が突然病気になったときに、どのような気持ちの変化があるでしょうか。「病気は治るだろうか？」「どのくらい治療にお金がかかるのだろうか？」「仕事を休まないといけない」「家事や育児を誰に頼んだらいいの？」など生活への不安に直面することもあると思います。高齢社会となった日本で、長い人生の道のりを病気と無縁で過ごした人も、男女を問わず老後にご自身が介護を必要としたり家族の介護を担うことも増えています。患者さんやご家族が求める医療は決して体の治療だけではありません。そのようなときに、安心して療養に臨めるよう生活の不安や困難を相談できるのが、社会福祉の専門家であるソーシャルワーカーです。

ソーシャルワーカーは「社会福祉士」「精神保健福祉士」という国家資格を基礎資格として、地域で生活する人たちに社会福祉の立場から相談を受け、生活課題の解決・調整を援助し、社会復帰を促進する業務を行います。病院で働くソーシャルワーカーは医療ソーシャルワーカーとも呼ばれ、主に病気による生活の変化と向き合う患者さんやご家族にこれらの業務を行う職員です。皆さんのかかりつけの病院では「ソーシャルワーカー室」「医療福祉相談室」「患者支援センター」「地域連携室」などの部署に所属しています。

医療ソーシャルワーカーの仕事

患者さんが安心して治療に臨むことができるように、医療ソーシャルワーカーは健康保険の各給付や福祉施策や介護保険制度・公的年金制度などの社会保障制度の相談、退院後の生活に必要な福祉用具やサービス導入支援、リハビリテーションや療養を継続する場合の転院相談などに対応します。病気のため仕事を休業する場合の所得補償や家事・育児・介護の問題、学校を長期欠席する場合の教育の問題など病気によって影響を受ける生活の変化についても相談援助を行います。もちろん相談の秘密は厳守されます。

相談といっても、患者さんの代わりに答えを出したり指示する役割ではありません。治療の主人公である患者さんやご家族と面接を行い、一緒に生活状況を考え、課題解決に向けて患者さんが自ら意思決定し進んでいくことをともに歩み支え続けるのが医療ソーシャルワーカーです。そのために、例えば市役所や保健所、介護保険関連機関、転院相談の場合は他の病院など、様々な地域の関係機関との調整を行います。病院内でも医師だけでなく看護師やメディカルスタッフなどの職員と連携して治療を支援します。対外的には、常日頃から支援ネットワークを形成したり、患者会活動に協力したり、専門機関との連携を行うなど地域に働きかける活動も担っています。社会の仕組みや制度の運用を地域全体で考えていくために病院の窓口として情報を発信することも、ソーシャルワーカーの大切な使命です。

奈良県で活動する医療ソーシャルワーカーの情報は、全国の医療ソーシャルワーカーの専門職団体である（公社）日本医療社会福祉協会のホームページや、奈良県医療社会事業協会から得ることができます。「これからどうすればいいのかわからない」「家族に迷惑をかけたくない」「どこに何を聞いたらいいのかわからない」と思った時こそ、患者さんやご家族のサポーターである医療ソーシャルワーカーを思い出してください。

第3回 平成27年5月23日 山田風太郎『人間臨終図鑑』を読む

附属おやさと研究所 教授 堀内 みどり



『人間臨終図巻』(上・下)は、1986年に出版され、1996年までに17刷と増刷を重ね、文庫にもなっている。著者の山田風太郎(1922～2001)は、伝奇小説、推理小説、時代小説を著し、『魔界転生』や忍法帖シリーズがその代表として知られる。

その山田が、古今東西の“著名な”人々の死のあり様について、淡々と著述したのが本書である。死に至る彼は、家族に囲まれ、温かい安らぎの中で、小説の傍ら「死」を見つめる作業を始めたという。戦時中に書いていた日記を読み返し『戦中派不戦日記』を出版。さらに、人歴史上の人物の死の様子を集めた本『人間臨終図巻』を出版した。

日課の散歩中、したたかに転んだ山田は、病院で診察を受け「パーキンソン症候群」と告げられ、「老いとは、死に向かって身体が壊れていく過程なんだね。」と。1996年、74歳で突然倒れ、慌てて駆け寄った妻に一言「死んだ…」とつぶやいたという。

その後、筆を握れなくなり、妻による口述筆記で執筆を継続。2001年7月28日、「いまわの際に言うべき一大事はなし」と、彼自身が愛したその言葉通り、彼は言葉一つも残さなかったといわれている。

彼がなぜこのようなものを著そうとしたのか、単に死の準備だけだったのか、大変興味深い。また、どのような視点で記述対象者を選んだのかも気に掛かる。彼は、区切り区切りで死を捉えた「ことば」を紹介し、自らも死について語っている。

“人間は他人の死には不感症だといいいながら、なぜ『人間臨終図鑑』など書くのかね？” “…いや、私は解剖学者が屍体を見るように、さまざまな人間のさまざまな死を見ているだけだ” (『人間臨終図鑑』上、p 148)

さて、本書の上巻・下巻の帯には、次のようにこの本について書かれている。

(上巻)この人々は、あなたの年齢で、こんな風に死んだ！ 死を恐れ、死に苦しむものは、あなただけではない。この地上に生きた英雄、武将、政治家、作家、芸術家、芸能人、さらに犯罪者たちが示す人間ラストの真の様相。15歳～64歳で死んだ人々。478名。

(下巻)人間の死は、『臨終図巻』のページを順々に閉じて、永遠に封印してゆくのに似ている！あなたはどんな死を望ましいと思うのか。荘厳、悲壮、凄惨、哀切、無意味、有意味、あらゆる死のタイプがここにある。これは人間の死に方の一大交響楽だ！ 65歳から121歳で死んだ人々、450名。

10代の死は「一つの物語」のようで、筋書きがあり、それにしたいが、他に選択肢がなかったような“一途な”死：(結果として)若くして死に急いだようにも見える。時代や社会背景が関係しているのかもしれない。いずれも世間の話題となった。八百屋お七(火あぶり)、大石主税(赤穂義士・切腹)が15歳。1960年当時の社会党委員長・浅沼稲次郎を刺殺した山口二矢(17歳、少年鑑別所で自殺)もとりあげられた。また、死と密接に結びついた「病」は、その病気そのものへの対応や痛みとの闘いがずいぶん多く描かれている、その原因が貧困であったり、職業上の悩みと相応するものであったりするが、壮絶で悲しいものが多い。自殺へのプロセスともなる。時代と関連して憤死という事例もある。

死はいずれ誰にでも訪れるものではあるが、その死は平等ではない。「なぜ」と思わざるを得ないものもある。それ故、自らの「生死」観を養うことが肝要ではないかと思う。

第 4 回 平成 27 年 5 月 30 日

環境ボランティアに参加しませんか

— 10 年以上にわたる布留川清掃から見えてきたこと —

附属おやさと研究所 教授 佐藤 孝則



大和川は、清流・濁流などさまざまな水が流れ込む 1 級河川で、その支川の一つに長さおよそ 11km の布留川がある。この川は、奈良盆地東側の龍王山山頂付近を水源とし、天理ダム、天理市街地を通り抜けて、天理市と田原本町との境界付近で大和川と合流する。その間に、「布留川北流」「布留川南流」などいくつもの支流に分かれて大和川へ流れ込んでいる。

この講演では、地元的环境 N P O が 10 年以上おこなってきた布留川および周辺域の清掃活動によって、どのような成果が得られたのか、どのような経緯によって実施されたのか、またその間に布留川や本流の大和川の水質はどのように変化したのか、などについて紹介した。

1. 「NPO 法人 環境市民ネットワーク天理」の活動

布留川は、大和川の中で最も早く水質が改善された支川の一つである。この水質改善と布留川清掃活動とは、決して無縁ではない。この活動を 2000 年から毎年実施してきた「N P O 法人 環境市民ネットワーク天理」は、天理市内の市民・市民団体、事業者、行政の 3 者によって構成された環境保全団体で、隔年に実施される「天理環境フォーラム」の主管団体でもある。布留川清掃は、結果的に、地域の、地域による、地域のための「協働」活動として広がった。

毎年 6 月の環境月間におこなわれるこの「布留川清掃」には、毎回 100 名前後の参加者があり、ごみは年毎に減少している。本年度で第 16 回目を迎えるが、天理市庁舎横を流れる布留川では、ゲンジボタルが乱舞するまでに回復した。また、市庁舎から歩いて数分の布留川南流では、カワニナ、サワガニ、スジエビなど数多くの水生生物が観察されるまでになり、まるで山麓の自然が天理市街地の中心部に突然出現したような状況となっている。

また当該 N P O は、天理市民の水瓶の一つである天理ダムの「青垣湖」へ流入する水を確保するため、2003 年 3 月から布留川源流域で植林と育林を兼ねた「水源の森づくり」を始めた。この N P O が進める活動目的は、まさに、布留川流域という公の場所（グラウンド）で、市民・市民団体、事業者、行政の 3 者が協働で活動（ワーク）できるような“場”づくりを支援することにある。

2. 「グラウンドワーク」の活動

そもそもこの「グラウンドワーク」は、1980 年代にイギリスの都市周辺部で始まった環境再生のための実践活動で、地域社会を構成する住民・企業・行政の 3 者がパートナーシップ（協働）を組み、身近な環境（グラウンド）の整備・改善（ワーク）をおこなう環境改善活動のことである。企業と行政は資金、人材、土地などを提供し、住民はボランティア活動による労力を提供して活動目的を達成する仕組みである。日本では 1990 年代に導入され、2000 年以降、各地でこのような環境保全団体が生まれた。

日本で最初にグラウンドワーク運動を始めたのは、静岡県三島市で活動を続ける「グラウンドワーク三島実行委員会」である。グラウンドワーク三島は、行政が行えば新興住宅地の公園整備に 4,000 万円かけるところを、市民、企業、行政の協働によって 17 万円で実現させた、という実績を持つ。

3. 改善された大和川水系の水質

大和川は、2007 年まで水質「ワースト 1」を何回も甘受してきたが、2008 年以降はその汚名を返上した。ただ、2006 年以降、「ワースト 1」であっても、水質の汚れの基準とされる B O D（生物化学的酸素要求量）の平均値は、

環境省が水質汚濁の指標とする環境基準値（5 mg/L）を下回り、昨年（2014 年）まで毎年下がり続けている。ちなみに、2014 年の平均値は 2.4mg/L（75% 値：2.9mg/L）で、この平均値は高度経済成長が始まった昭和 30 年代の水質に明らかに戻ったことを意味する。私たちが気付かないうちに、大和川は水遊びをふつうに楽しむことができるきれいな川にまで、再生されていたのである。

この 15 年間、大和川流域の下水道普及率も格段に高まり、流域住民による河川環境の改善対策も進んだことが水質の環境基準値を大きく下回る結果になったことは、間違いのない事実である。ただ、その支川にあたる布留川が、支川の中では最も早く環境基準値を下回ったことは、流域住民による清掃活動が功を奏した結果と考えるも良い。

第 5 回 平成 27 年 6 月 6 日

江戸時代における民衆信仰の興隆と変容

人間学部総合教育研究センター 教授 神田 秀雄



江戸時代後期から明治時代にかけての日本には、いくつかの新しい宗教が生まれている。「幕末維新期の民衆宗教」と呼ばれているそれらの宗教は、江戸時代の宗教史、特に民衆の信仰活動のどのような筋道の中から誕生したのだろうか。

よく知られているように、江戸時代の社会は、寺請制と本末制という二つの制度によって大きく枠付けられていた。すなわち、キリスト教の禁教が大原則とされた江戸時代には、支配階級のごく一部を除くほとんどの人はいずれかの仏教寺院の檀家として登録され、キリシタンでないことをその寺に保証してもらわねばならなかった。また、仏教の各宗派では、本山がすべての末寺の活動に責任を負わされ、末寺は本山の統制に服すべきものとされていた。そして、そのような制度的枠組みがあったために、当代の人々にとって檀那寺は、葬式や法要を依頼する対象ではあるとしても、自由な信仰活動を展開する場にはなかなかにくかった。たしかに江戸時代にも、浄土真宗や日蓮宗などのように、宗派としての宣教活動に熱心な宗派もありはしたが、日常生活上に何かの問題を抱え、救いを求める必要が生じた場合、人々は、各自の檀那寺よりも、むしろそれとは直接関わりのないさまざまな神仏に頼っていくことが多かったのである。

江戸時代民衆の宗教的な活動が寺請制度（檀那寺を場とする活動）の枠外で活発化しはじめたのは、おおむね元禄時代、つまり5代将軍綱吉の頃からだった。そうした事情の表れの一つは、寺社が本尊や秘仏・霊宝などを外へ持ち出して参詣を受ける「出開帳」の流行が、この時期の江戸にはじめて起こったことで、以来、幕末まで、特に山城国清涼寺、信濃国善光寺、下総国成田山新勝寺、甲斐国身延山久遠寺の出開帳は、江戸出開帳の「四天王」と呼ばれていった。また、街道や内海航路の発達にともなって、遠隔地霊場への人々の参詣が普及していったこともそのもう一つの表れで、伝統的な伊勢参りや善光寺参りなどのほか、讃岐の象頭山金毘羅大権現、相模の大山阿夫利神社や江之島弁財天、山城の愛宕山、大和の生駒山宝山寺などへの参詣や、富士山や御嶽山などへの登拝、およびそれらを目的とする講組織の結成も、特に18世紀以降、急速に広まっていった。さらに、突然に何らかの利益が噂されて急速な流行を遂げる「流行神」が、元禄時代頃から、三都などの都市部を中心に現れるようになり、翌世紀初頭の文化・文政期には爆発的に簇生するようになっていった。

江戸後期から明治時代にかけて、「幕末維新期の民衆宗教」各宗派は、およそそのような民衆的な信仰活動の展開を受け継ぐかたちで成立している。とはいえ、「出開帳」や「霊場参詣」の流行が各宗派の成立を直接促したわけではもちろんない。むしろ当時の人々にとって「出開帳」や「霊場参詣」は、仏教諸宗派の宗祖や中興者に関する伝承、寺社の縁起や神話など、民衆的な信仰にまつわる各種の物語や情報に接する貴重な機会になっていたのである。また、たとえば天理教の原典の一つである『おふでさき』に、「このたびハ もふたしかなる まいりしよ(参り所) / みへてきたぞへ とくしん(得心)をせよ」とあるように、後に大教団に発展した宗派においても、当初、人々は、「参り所」すなわち「流行神」のような参詣対象にすがる意識で参詣していたと解せるのである。

1802(享和2)年に尾張国熱田で創唱された如来教には、約250篇にもものぼる教典『お経様』をはじめとする膨大な教団史料が所蔵されており、それらを分析すると、同教が、以上に見たような江戸時代民衆の信仰活動の展開から多くの要素を摂取して成立していたことを確認できる。如来教はまさに典型的な事例であるが、同様な特徴は、「幕末維新期の民衆宗教」一般が程度の差こそあれ共有している特徴だとみることができよう。

第1回 平成27年6月13日

アメリカ人とは誰のことか? —揺らぐ米国市民の境界—

国際学部地域文化学科 教授 山倉 明弘



アメリカ合衆国は、現存する世界最古の民主主義共和制国家で、独立以来の数々の変化にもかかわらず統治体制は基本的に変わっていません。米国の独立宣言、憲法、1790年帰化法などの基本的文書に表れた思想は、今日に至るまで米国の社会制度やアメリカ人の思想に大きな影響を与えてきました。

1776年の独立宣言は冒頭で「すべての人間は平等に造られ」と謳いましたが、イギリスからの離脱を正当化するための批判の対象となった英国王のふるまいの一つとして、「情け容赦のない野蛮なインディアンを、辺境地帯の住人に対してけしかけようとした」ことを挙げました。そして、1787年に制定した

米国憲法には、「連邦の法律を執行するために、また、反乱を鎮圧し、あるいは侵略を撃退するために、国民義勇軍の招集についての規定を設ける権限」を議会に与えましたが、この「反乱」は奴隷の反乱を想定しており、また、「侵略」は英国軍の攻撃に加え、インディアンの襲撃が想定されていました。

一部に反対のあった憲法を大衆に売り込むための文章を集めた『フェデラリスト・ペーパーズ』には、神が米国という国を「一つの団結した人民」、すなわち、「同じ祖先の血を引き、同じ言葉を話し、同じ宗教の信仰を公言し、同じ統治原則に帰属し、風俗習慣の似通った人々」にお与えになったと書いてあります。

当時東海岸に張り付くように存在していた新生国家としては、西へ西へと膨張し国土を広げていく必要がありました。それにはインディアン追放と彼らから取り上げた土地への人々の入植が不可欠であり、そのためにヨーロッパからの移民を促す必要がありました。

そこで、米国議会は1790年に初めての帰化法を制定し、「自由な白人である如何なるエイリアン（外国人）も、合衆国の域内でその法の管轄内に2年住んでいれば市民として認められる」としました。このアメリカ初の帰化法は、その後現在に至るまで「だれをアメリカ人として受け入れるか」という問題に関して、アメリカ人たちに重大な影響を与えてきました。アメリカ市民の境界にとって、1790年帰化法こそが最も重要な法なのです。

「白人」をアメリカ市民と定めた1790年帰化法は、「白人」ならだれでもアメリカ人にするという意味できわめて寛大で、過剰に包摂的な法でした。そのために、19世紀になるとヨーロッパから大量の、実にさまざまな移民が流入し、なかには宗教や生活習慣が従来のアメリカ人とは大きく異なる「好ましからざる人々」が大勢混ざっており、このことはやがて20世紀にはいと激しい移民規制論争を引き起こしました。1924年に制定した移民法は、プロテスタントのアングロ・サクソン民族が中心である西欧・北欧からの移民を優遇し、カトリック教徒が大半を占める東欧・南欧からの移民を冷遇するものになりました。

同時に、1790年帰化法は、白人以外の者をアメリカ市民としないことを決めた点で、きわめて過酷で、過剰に排他的でした。米国議会は1882年中国人排斥法で中国人の移民と帰化を禁止し、また1924年移民法では日本人を含むアジア人の移民を全面的に禁止し、さらに米国政府は、第2次世界大戦中に在米日本人と彼らから生まれた日系アメリカ人約13万人を内陸部の砂漠地帯に設けた強制収容所に監禁しましたが、1790年帰化法が「白人以外はアメリカ社会の正式な一員とは認めない」と長年にわたってアメリカ人を教育してきた効果なしには考えられないことです。

アメリカ初の「黒人」大統領とアメリカのマスコミがこぞって報道したときの興奮にもかかわらず、白人警官による黒人青年の殺害に端を発した人種暴動が、全米各地で今でも発生しています。建国時にできた国家統治体制の長い影が今でも感じられます。

第2回 平成27年6月20日

“先住民”の誕生：先住ハワイ人の事例を中心に

国際学部地域文化研究センター 准教授 井上 昭洋



「先住民」という言葉は、1980年代から世界中で盛んに使われるようになった。確かに「先住民」と呼ばれる人たちは存在するのだが、国際機関では明確な定義付けはなされていない。しかし、近年では、グローバリゼーションの流れの中で、世界各地の先住民が国境を越えて連携し、大きな発言力を持つようになってきている。

「先住民」の構成要素としては、その名が文字通り指し示す「先住性」に加えて、自らの土地で劣勢な社会的状況におかれている「被支配性」、外来者との接触前から現在に至るまでの歴史が共有されているという「歴史の共有」、そして自らを“先住民”と認識する集団を構成しているという「自認」、以上四つが考えられる。

「先住民」概念は、グローバリゼーションが進行する中で、その意味が拡張している。そのため、人類学の分野では、北米、オセアニア地域のいわゆる入植者国家における先住民を「顕在的先住民」と呼び、一方、アジア、アフリカなどの地域において1990年代後半以降に出現してきた先住性を主張する少数集団を「潜在的先住民」と呼んで分類することがある。

米国のインディアン、オーストラリアのアボリジニ、ニュージーランドのマオリは、典型的な顕在的先住民であり、それらの国では先住民は19世紀を通して植民地政策や同化政策によって、社会的・文化的に抑圧され、社会の最下層に追いやられることになった。彼らは、多少の時間差はあれ、1960年代以降、自分たちの権利や文化の回復を目指す運動を積極的に展開し、現在に至るといふ歴史的経験を共有している。

ところで、先住民概念の最も重要な条件である「先住性」は、ただ単にその土地に先に住んでいたという事実を問うものではない。問題となるのは、現存する国家とその国家の成立前からその土地に住んでいた民族との関係性である。国家の成立以前からその土地に住んでいた民族が、少数派の立場に追いやられ、社会的に劣勢な状況におかれて初めて、彼らは「先住民」になるとも言える。

先住民の歴史的経験を考えれば、彼らについてしばしば問われる「純血性」や文化の「純粋性」は、単なる神話にすぎないことがわかる。先住民の「純血性」や彼らの文化の「純粋性」は、しばしば反動的な形で社会の多数派からその欠如を指摘されるが、先住民の特性はむしろ「混血性」や「混濁性」にこそある。

ハワイ人は、1778年にジェームズ・クックがハワイを訪れて以来、外来者を受け入れてきたが、1893年の白人勢力によるクーデターにより自分たちの王国を失った。その後、ハワイは1898年に米国に併合され、準州となり、1959年に米国50番目の州に制定された。19世紀後半以降、多くの移民を受け入れ、社会が多民族化するにしたいが、彼らも混血化し、その文化も外来文化を取り込んでいった。

1970年代以降、米国本土の公民権運動やインディアンのレッド・パワー運動に触発されて、先住ハワイ人は主権運動と文化復興運動を活発化させていく。ハワイ人の主権運動は1993年の王国転覆100周年に向けて力を増していき、彼らは先住民として目に見える社会集団となっていった。一方、1990年代後半以降は、いわゆる白人側からの反動的な動き（バックラッシュ）も起こっている。このような90年代以降の流れは、他の入植者国家の先住民のそれと軌を一にするといい。

日本においては、北海道と沖縄における先住者の問題を検討しなければならない。外来者によって植民化され、同化政策のもと抑圧されていったインディアンの歴史と北海道のアイヌの歴史に共通性が見られるのは言うまでもない。また、主権をもった王国を形成しながらもクーデターにより王国を転覆され米国に取り込まれていったハワイ王朝の末路に、琉球処分により日本に沖縄県として組み込まれた琉球王朝の歴史を重ね合わせるができる。

第3回 平成27年6月27日

歴史のなかの“ハイブリット”時代 ―戦国・織豊・江戸初期の世界と日本―

国際学部地域文化学科 教授 藤田 明良



1. 東アジアの“ハイブリット時代”の近畿

日本の戦国時代から鎖国前後の東アジア海域は、国際商業の盛況のなかでハイブリット（異種混合）な状況が生まれていた。例えば、日本と東南アジア各地を往き来した朱印船の船体は、中国のジャンク船をベースに西洋のガレオン船や日本の軍船の技術を掛け合わせたものであった。長崎の清水寺に奉納された角倉家の朱印船絵馬には船上で宴を楽しむ日本とポルトガルの人々が描かれているが、実際の朱印船に乗り込んだ船員や商人も日本・中国・ポルトガルなど多様な出自をもっていた。

『信長公記』には、信長が安土城築城に際して京都・堺・奈良の職人たちに加えて「瓦焼唐人の一観（一官）」が呼び寄せ「唐様」の瓦作りを命じたと、書かれている。また、秀吉が東山に大仏を造営した時には、「まず最初に異朝の者が来て、本尊をシクイ（漆喰）で造立」し、その後、大仏殿が建てられ、最後に本尊と後背に黒漆が施してから金箔を押ししたという。この大仏は数年後の大地震で崩壊してしまったが、最初に漆喰による大仏造りを主導したのは、薩摩・豊後・肥前など九州各地から召し出された「大仏油蠟唐人」たちである。「油蠟（ゆかき）」とは蠟殻を焼いて作った石灰に油を混ぜて強度を高めた漆喰のことで、当時、中国南部から日本へ伝わってきた先端技術であった。秀吉は同時に荏胡麻油や白木油の調達を諸大名に命じている。唐人とは日本に来住した中国人を指す用語で、時には朝鮮人も唐人と混称されることもあった。

2. 中国人の来住と唐人町の形成

東大寺の大仏が焼失した1567年、中国では国際的密貿易シンジケート「倭寇」に手を焼いた政府が、自国商船の海外渡航を解禁すると、中国人がドッと海外に進出し、東南アジア各地でチャイナタウンが形成された。日本渡航は禁止のままだったが、海上で東に針路を変えた中国船も少なくなく、倭寇に売買や拉致された者も含めて多くの中国人が九州などで暮らすようになった。島津氏や大友氏は彼らを積極的に保護し、有能な者は家臣・僧侶・御用商人などに取り立てて富国強兵に活用していく。秀吉が召し出した「油蠟唐人」もその一部だった。

中国人が住む場所は以前から唐房（当房）などと呼ばれていたが、この頃から唐人町という呼称が九州の沿岸各地に出現した。このうち玉名市伊倉の唐人町には中国南部様式の墓が現存しており、油蠟漆喰の実物を見ることができる。中国系漆喰を使用した墓は、南さつま市坊津や長崎市深堀にも残っている。同じく唐人町がある臼杵市には、陳元明など4名の唐人の屋敷地が「大仏しっくい免」として免税地になっている。臼杵の大橋寺にある元明一族の墓にも一部に漆喰が使われている。なお、鎖国時代の長崎唐人屋敷とは異なり、この頃の唐人町には日本人も混住していたし、他町に家を構える中国人も多く、国籍で居住地を分けることはまだなかった。

3. ^ま媽祖が語る多彩な交流史

中国では福建省を中心に航海神として媽祖の信仰が盛んであり、日本に来る中国船も小型の女神像（船頭媽）を祀っていた。南さつま市、平戸市、臼杵市をはじめ、肝付町（大隈）、都城市、飫肥（日南市）、上五島町など、唐人町やあった所や中国船の入港地には、古い船頭媽が今でも残っている。鎖国前に海の向こうからきた祖先が持ってきた、廻船業者に寄宿した旅の夫婦が置いていった、近くにあった寺が火事になったとき逃げてきたなど、さまざまな来歴を持つ。なかには17世紀に活躍する鄭成功ゆかりと伝えるものもある。その真偽についてはまだまだ不明なものが多いが、由緒や伝承をたどっていくと、文献史料の断片的な記載がにわかに精彩を帯びてきたり、通説では想定外の意外なつながりが見えてきたり、海をこえた交流の多様なカタチに遭遇することもある。

媽祖は天妃・天后ともいうが、観音の化身という伝承の影響で九州などでは菩薩（ぼさ）とも呼ばれた。鎖国の長崎では中国系住人たちが建立した唐寺に媽祖堂が建てられ、祭祀が続けられると共に入港中の中国船の船頭媽を預かる習慣が続いた。前夜まで唐人が多く住んでいた鹿児島にあった媽祖堂はすたれたが、菩薩堂通りに名を残している。島津氏が媽祖を祀っていた薩摩半島の野間岳は、鎖国後も沖を通過する唐船の遥拝を受けただけでなく、野間（娘媽）権現として日本人の船主・船乗りにも信仰が広がっていった。娘媽は福建地方における媽祖の通称である。南九州市の廻船問屋には、奇抜な日中混交の衣装に身を包んだ媽祖の掛け軸が伝わっているが、草の根の国際交流は新しい女神のファッションまで生み出したのである。

4. エピローグ — 奈良における異種混合

安土城の瓦製作を命じられた冒頭の唐人一観は、奈良衆を指揮して焼いたと『信長公記』は伝えている。また、中近世の興福寺の記録『多聞院日記』には、油と石灰を混ぜた屋根瓦用の漆喰が登場する。また、戦国時代から有名になる西大寺が製造・販売した豊心丹という漢方薬がある。享保年間の『豊心丹伝来書』では、鎌倉時代に叡尊が神から薬の処方を受けたのが起源というが、より古い『雍州府志』では授けたのは張三官という中国人になっている。当時の奈良にも、ハイブリットな交流が展開してたことを物語るエピソードであり、皆さんといっしょに、このテーマを掘り下げてみたい。

第4回 平成27年7月4日

越境する芸術／食文化：英国ルネサンスのデザート用木皿にみる移入・伝播の過程

国際学部地域文化学科 准教授 山本 真司

**1. 英国ルネサンスのバンケット・トレンチャー**

B Tはシェイクスピア作品の中でも効果的に使用され、ルネサンスのバンケット文化において独自の位置を占めている。英国貴族や裕福な商人の間で木製のB Tが流行したのは新年や結婚のお祝いの品として気軽に贈られるようになったためであろう。

2. イタリア：宮廷宴会文化の伝播

ルネサンスの宴会様式はイタリアの宮廷からはじまり、活版印刷の発展や宮廷料理人の移動によって徐々に北方に伝播し、ついには英国に伝えられた。イタリアの法学者アルチャートによって始められたエンブレムの伝統もB Tの装飾の図案の一つとして採用された。また円形図案は相互にデザインを貸借しあっていた。特に中心に人物像を描いたトレンチャーの円形デザインは、イタリアで流行したトンドと呼ばれる立体装飾の大型円形額縁の影響を一部受けていると考えられる。また象徴的図像が両面に描かれた結婚式の贈り物の丸盆の影響も考えられる。

3. オランダ：迫害された新教徒ユグノー移民の英国移住

B Tの図像をデザインしたド・パッセはエリザベス女王やオルノーコの肖像画だけでなく植物図版やエンブレム図像の制作でも異彩を放っている。プランタン・モレトゥス印刷工房はルネサンス期に西欧世界最大級の印刷工場として発展したが、その工房で製作されたエンブレム本に使用された図版がB T図版の構図にも影響を与えただけでなく、当時スペインによって迫害されてイギリスに移住した低地諸国の優秀な彫刻師たちの作品や高度な技術の影響を受けていることが分かる。

4. アメリカ：新大陸への伝播

米国東海岸の博物館にはイギリスから持ち込まれたB Tが複数残されている。初期の植民者たちにとって割れにくく軽いトレンチャーは、数少ない貴重な娯楽や贈り物となった。B Tの装飾として大きな位置を占める植物模様は、ひとつには新古典主義的な意味から古代ギリシャやローマの世界への憧れから付与された神話的寓話的な意味づけと同時に、新種の植物といったエキゾチックな対象への大いなる興味もあっただろう。

5. 文化的社会的背景としての宝くじ

エンブレム本にも宴会の余興的くじ引きの要素を兼ね備えたものがあるが、B Tも同様にエンブレム本とくじ引きの両方から影響を受けている。B Tの使用方法に関してはまだ研究者の間でも議論があるが、これまでの調査では木盤の裏面にはほとんどデザート菓子や果物による汚れが見られないことから、デザート盆としての使用というよりは、①新年の贈り物として、②宴会後の余興として音楽やくじ引きの要素を取り込みながら利用されたことが推察される。またたとえ実際にデザート盆として利用された場合でも、イタリアの出産盆のように表面を布で覆って保護したであろう。

結論 道徳的な娯楽・嗜好品の視覚化と携帯性、贈り物文化、宝くじ文化の影響

このようにB Tはノリッジやコルチェスターに移住したユグノー印刷工の影響だけでなく、イタリアやオランダ・ベルギーなどの低地諸国からのくじ引きなどの宝くじ文化的の影響や、エンブレム本やイソップ、植物の装飾デザイン、あるいは聖書の内容を分かり易い図と言葉によって表した新年の贈り物や宴会の小道具としても活用された。またB Tに典型的なラウンデルという円形の形状はフィレンツェ地方の出産盆の影響を受けている可能性があり、さらにはミニアチュールやステンドグラス、コインやマジョリカ皿などルネサンスの様々な装飾文化からも多様な影響を受けたと考えられる。

第1回 平成27年9月26日 御所市茅原の大トンドと役行者伝説

文学部歴史文化学科 教授 齊藤 純



1. 茅原の大トンド（左義長）

御所市茅原の吉祥草寺の境内で、毎年1月14日、県の無形民俗文化財に指定された大トンドの行事が行われる。このトンドは吉祥草寺と茅原・玉手の両大字で執行され、寺で行われる修正会の結願の日の行事になっている。その際、五穀豊穡・厄除などを祈願し、年の豊凶も占う。行事の起源については「天智天皇の時に役小角が天下太平・五穀豊穡などを祈願して始めた」「文武天皇が御病気の際、吉祥草寺で靈験があったので盛大な法要を行わせた」「役行者（役小角）が島流しから帰ってきたのを祝った」などの諸説がある。

2. 役小角の伝承

役小角は、修験道の開祖とされる伝説的な人物で、797年成立の『続日本紀』文武天皇3年（699）5月24日条に次のような記載がある。

「役君小角を伊豆の島に配流した。初め小角は葛木山に住み呪術で称えられていた。外従五位下の韓^{からくにのむらじひろたり}国連^{さんげん}広足が師と仰いでいたが、後に小角の能力をねたみ、妖惑のかどで讒言した。そのため小角を遠方に配流した。世間では、小角は鬼神を使役することができ、水を汲ませ、薪を採らせ、もし命令に従わなければ鬼神を呪縛したと伝えている。」

後世、この人物像が展開し、8C末～9C初の『日本霊異記』では葛木上郡茅原村の人で、鬼神を使い葛木山から金峰山に橋を架けようとした等と伝えられるようになった。

3. 茅原の大トンドの起源伝説

役小角に関わる茅原の大トンドの起源譚で興味深いのは、「役行者が島流しから帰ってきたのを祝った」という伝説である。今も口伝で聞くことができる話だが、明治24年に記された吉祥草寺の寺院明細帳に記載があり、元は縁起などにも記されていたらしい。歴史的には認めがたい伝説だが、トンドの意味や地元での役行者像を探る上で、大変に貴重な伝承である。というのは、大和高田市奥田で、次のような伝説が聞き取られていた。

「奥田周辺のムラでは、一月十五日にトンドを行う。このトンドを行うようになったのは、役の行者があまりにも偉い人でムラ人のもてあますところとなり、火を焚いて吉野に追い出したことに由来するという（桜井満・岩下均『吉野の祭りと伝承』桜楓社。）

民俗学の研究によると、もともとトンドは、彼方からやってきた歳神^{としがみ}（正月の神様）を火や煙に乗せて送り返す行事である。県内でよく聞くわらべ歌に「正月さんどこまで、～山の裾まで」という歌詞があるが、正月さん、すなわち歳神は、暮れに里近くの山にやってくる。つまり、山に囲まれた土地では、歳神は山の彼方から家々を訪れ、それを送り出す儀式がトンドである。ところで、この歳神はありがたい神様であるが、かといって、いつまでも居られては困る存在である。年中、まさに「盆と正月が来たようだ」と普通の生活ができないわけで、いわば、居られると「もてあますところ」となる。このように考えると、大和高田市奥田の奇妙な伝説は、トンドで送り出す神様にまつわる話だったものが、役小角という歴史上の人物に置き換わってできた伝説とみなすことができる。

そして、このような置き換えが茅原の大トンドについても起きた。その結果、大トンドは「役行者のお帰りを祝った行事だ」という理解が生まれたと推定されるのである。その背景には、役行者は正月の神様にも似たありがたい存在、また、正月様同様、山から来て山へお帰りになる存在だという、地元での理解があったことも、あわせて想定できる。こうした意味で、伝説には、史実とはまた異なった資料的価値が認められるわけである。

第2回 平成27年10月3日

阿礼と安万侶 ―古事記編纂者の近代―

文学部歴史文化学科 講師 黒岩 康博



古事記の序において、その編纂に携わったと記される2人の人物がいる。稗田阿礼と太安万侶である。彼らは特に近世後半から昭和前期にかけて顕彰されることになるが、子細に見ると、その過程は3段階に分けることができる。後述するが、特に20世紀に入ってからは、顕彰のメカニズムにおける国と奈良県との関係が重要であった。

具体的に顕彰過程を検討する前に、まず史料上の阿礼と安万侶の様子を見てみると、彼らが天武・元明天皇の命により古事記編纂にあたったということは、前述した古事記上巻の序にしか記されておらず、古事記が成立した712年をカバーするはずの続日本紀にも、その記事は見当たらない。しかし、そのような史料上での制約にもかかわらず、安万侶を祭神とする多神社・小杜神社の存在は、18世紀の地誌である「大和志」や『大和名所図会』などでうかがうことができ、また幕末維新期に成立した菊池容斎の人物画伝「前賢故実」では、古事記編纂の功績・没年とともに安麻侶の姿が描かれるなど、その図像化も見られた。

(第1段階) そうした古事記編纂者、特に安万侶を神・偉人と捉える心性は、国学の勃興と相まって、明治期には古事記本文(テキスト)の研究隆盛へとつながり、チェンバレンの『英訳古事記』(明治15年)も生んだ。明治32年には、高山樗牛・高木敏雄・姉崎正治の間でスサノヲの性格をめぐる論争が起こるなど、哲学・神話学・宗教学といった様々な学問の観点を取り入れた研究が見られた。ところが40年代に入ると、そのような学問上の自由とは別に、新たな神格化の動きが登場する。明治44年2月、古事記の撰上1200年を記念して多神社で祭典が挙行され、翌3月には安万侶が撰上の功績により従三位の位階を贈られたのである。同じ3月には、皇典講究所ほか計5団体の発起による古事記撰上千二百年記念会が靖国神社能楽堂で行われ、阿礼・安万侶の功績が盛大に讃えられた。

(第2段階) 同記念会では安万侶像・多神社全景の絵葉書も配布されたようで、東京での盛り上がりを受け、どちらかと言えば安万侶にウェイトを置いた顕彰が地方においても進みそうであったが、その流れに歯止めを掛けたのは、小杜神社の祭神を安万侶とは認めなかった内務省神社局であった(大正元年)。大正期に編纂された『奈良県磯城郡誌』や『奈良県風俗誌』では、小杜神社・売田神社の祭神はそれぞれ安万侶・阿礼と記されていたが、斎藤美澄・大宮兵馬ら在地の研究者はそれらをいぶかしむ著書(『大和志料』)や報告書(『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第3回)を残しており、地元も知識上一枚岩という訳ではなかった。

(第3段階) このように、大正期の奈良県は、全国的に盛り上がりとする顕彰の流れを自家葉籠中の物とはできなかつたが、童話普及運動という全く異なる方面から、阿礼・安万侶と奈良県との結び付きは強固になった。大正15年に設立された奈良県童話連盟は、昭和2年に機関誌『童心』を創刊すると、翌3年より、日本のアンデルセンを探そうという児童文学者久留島武彦の提案に乗るかたちで、にわか「話の太祖」として阿礼の顕彰を始める。同5年には現在まで続く阿礼祭の第1回が売田神社で開催され、巖谷小波揮毫の記念碑も建てられるなど、とんとん拍子に話は進み、同7年には日比谷公会堂でも阿礼祭が催され、阿礼小唄・阿礼踊りが披露されている。

今まで安万侶の陰に隠れ気味であった阿礼が、「お話の神様」として前面に出ることにより、戦時期には兩人揃って古事記「纂録功臣」という、楠木正成・新田義貞と同じ「功臣」というカテゴリーで顕彰されることとなる。昭和16年奈良県知事の発議により古事記纂録功臣顕彰会が設立されると、日本文学報国会と共催で古事記まつり(同17年)・古事記展覧会(18年)が東京で催されるという、明治末と同じような顕彰経路をたどった。そして同18年、比定に関する様々な疑義があるにもかかわらず、売田神社の社号が延喜式の記載に合わせて売太神社と変更され、同19年には阿礼・安万侶を祭神とする売太・小杜神社は村社から県社へと昇格し、本殿の遷座祭を行った。古事記編纂者阿礼・安万侶顕彰の完成である。

第3回 平成27年10月10日

叡尊と忍性 —鎌倉時代の仏教改革者—

文学部歴史文化学科 非常勤講師 吉井 敏幸

はじめに

平安末～鎌倉期に二つの仏教改革運動。

専修念仏←平安中期からの浄土教信仰、彼岸の信仰

戒律仏教←権門寺院（旧仏教）の中からの仏教改革運動。

禅宗・日蓮宗はこれに近い

この戒律仏教運動がむしろ鎌倉仏教の中心、
改革運動の中心が大和・奈良で叡尊・忍性
はその中心



1. 平安末期の仏教の墮落と仏教改革運動

(1) 平安末期の仏教の墮落

10世紀から

聖の発生〔史-1〕〔史-3〕、新しい勢力の台頭 在地領主・田堵名主層
貴族仏教、鎮護国家、貴族の安穏と後生菩提の祈祷。

寺領荘園の獲得のために、嗷訴の繰り返し、神輿動座、悪僧の跳梁、南都焼打、
これに対する世間の非難と仏教側の反省。〔史-2〕〔史-4〕

12世紀の仏教改革運動は、勸進聖の組織化と戒律仏教運動=禅律僧または専修念仏
戒律仏教運動の中心が南都または大和

6人の改革派僧侶。

実範 (?-1144)・貞慶 (1155-1213)→公家出身。戒律運動の初期、教団はつくらず。

重源 (1121-1206)→東大寺大勸進職、勸進による土木事業

叡尊 (1201-1290)・忍性 (1217-1303)・覚盛 (1194-1249)→教団を組織。全国に末寺。

(2) 改革の機運

実範 (?-1144)。興福寺僧、戒律復興の先駆け、中ノ川寺（成身院）

貞慶 (1155-1213)。解脱上人〔図-1〕、藤原氏出身、興福寺僧。16年間笠置寺、海住
山寺に通世〔史-2〕。復興寺院は浄瑠璃寺、唐招提寺〔史-3〕、海龍王寺。

重源 (1121-1206)。〔図-2〕山岳修行、仁安2(1167)入宋、平家南都焼打〔史-4〕の後61
才で東大寺造営勸進職〔史-5〕と各地で土木事業〔史-6〕、舍利信仰 三角五
輪塔〔図-3〕

覚盛 (1194-1249) 大和国出身。興福寺で出家、常喜院で戒律を学び、嘉禎2(1236)叡
尊らと自誓授戒。四条天皇らに菩薩戒。唐招提寺に入寺し、中興の祖となる。

2. 西大寺叡尊の宗教活動

特徴：戒律、鎮護国家と授戒による多様な個人救済、勸進聖の組織化と社会事業

① 生い立ちと修行

建仁1(1201)5 幼少〔史-8〕、建暦1(1211)醍醐寺にて修行、建保5(1217)17歳で
出家〔史-7〕。安貞2(1228)28歳で阿僧が魔道に落ち疑問。貞慶の弟子の戒如に師事
し戒律を学ぶ。

② 自誓授戒と授戒

嘉禎2年(1236)9月 東大寺にて自誓受戒を覚盛、円晴、有巖の4人で行う（自誓四
哲）〔史-9〕。暦仁元年(1238)西大寺に入寺、西大寺流。各地で菩薩戒などの授戒〔史

- 10) [史-13] [史-14]

③様々な信仰

釈迦信仰 [図-7]、行基信仰と社会事業、聖徳太子信仰 [史-10]、行基や聖徳太子ゆかりの寺院の復興、文殊信仰と非人救済 [史-11] [図-8]、その背景には勸進聖集団。鎮護国家信仰 [史-12]

④その他

古代寺院の復興、全国に末寺の拡大、葬送に従事。弘長2(1262)関東下向、関東では金沢称名寺が寄進される。文永1(1264)9光明真言会の創始。弘安7(1284)9四天王寺別当。弘安9(1286)宇治川綱代の撤廃、十三重塔 [図-6]。正応3(1290)8.25遷化、龜山上皇「興正菩薩」号 [史-7]

3. 極楽寺忍性の宗教活動

[図-5]、叡尊の弟子、文殊信仰による利他行、特に非人救済、関東で活動

①生い立ちと修行

建保5(1217)7.16大和国城下郡屏風里(三宅町屏風)生。母の菩提を弔うため額安寺で出家、東大寺戒壇院で受戒、信貴山、叡尊との出会いと文殊信仰 [史-15] [史-17]

②関東へ

寛元1(1243)関東へ下向、建長4(1252)年三村寺に、以後10年三村寺に在住 [史-18]。文永4(1267)年鎌倉極楽寺に入寺。北条氏の帰依

③非人救済

大和七宿、鎌倉極楽寺 [図-9]、奈良坂の非人救済 [史-16] [史-17] [史-19]、四天王寺別当、悲田院と敬田院、西門の再興 [史-20] [図-10]

④晩年

摂津国多田院別当、鎌倉永福寺、東大寺大勸進、四天王寺別当 [史-21]。嘉元1(1303)7.12極楽寺で没。後醍醐天皇から忍性菩薩の号 [史-16]、律宗寺院の保護 [史-21]、忍性の墓地 [図-11]

4. 律僧の活動の成果

律宗勢力は、室町時代に次第に衰退、戦国末期には影響力無し。専修念仏宗(浄土宗・浄土真宗)、日蓮宗が勢力拡大→今日の宗教情勢。

今日への影響

- ・葬送と仏教の結びつく。多くの墓寺はもとは律宗。
- ・仏教信仰が村から個人または家単位に。その中間で、個人に戒を授ける。
- ・多くの古い寺院が存続した。寺院の復興を勸進による経済力で行う。
大規模な寺院では東大寺・西大寺・法隆寺・薬師寺・唐招提寺
中規模な寺院では、海龍王寺、白毫寺、元興寺、大安寺、般若寺、法花寺、橘寺、額安寺等々
- ・律宗勢力が復興しなかった寺院は興福寺くらい。興福寺は自力(藤原氏)による。ただし寺院維持には律宗勢力(唐院・新坊)
勸進活動→寺院の復興と建立。経済と技術を握る。
- ・各寺院に律家。東大寺では勸進所、指図堂、知足院。興福寺では唐院と新坊。法隆寺では北室院。

第4回 平成27年10月18日

坂本龍馬があこがれた？戦争 ―天誅組の乱を見なおす

文学部歴史文化学科 非常勤講師 中村 武生



1. 坂本龍馬と天誅組

文久3年秋頃（1863年）、故郷土佐高知の姉乙女や姪の春猪に宛てた坂本龍馬の書翰によれば、「先日大和国にてすこしゆくさのよふなる事」と、同年8月から9月にかけて起きた、天誅組の乱を話題にしている。この戦いに姉や姪が既知の土佐出身者（池内蔵太、吉村虎太郎、土居佐之助、上田宗兎〈のち後藤深造〉など）が参加したことを述べ、「先日皆々うちまけ候よし」と、その敗戦を伝えた。そのうえで、私が少し「さし引」をしたならば、まだまだ討手の勢ハひとかけ合せにて、打ち破ったのと言う。実際に現場にいなかった傍観者の無責任な発言であるのだが、それほど龍馬はこの戦争に思い入れがあったといえる。大坂夏の陣以来、約250年ぶりの上方での市街戦に参加できた、仲間へのいわば嫉妬ではなかったか。

2. 天誅組研究のこれまでと課題

1960年代以前の明治維新史研究は、どのような階層によって維新が実現されたのか、その変革主体者の解明などがながく課題であった。そして革命段階論的の下からの革命（ブルジョア革命）であることが望まれたため、多くの農民が参加している天誅組の乱などは研究対象となり得た。

ただし事件そのものは、指導した下級武士層が農民を利用しただけと理解されたため、それに気づかれて逆襲され、拳兵は失敗に終わったと評価は低かった。とはいえ文久3年の段階で「討幕の勢力配置の見取図がほぼできあがった」（堀江英一『明治維新の社会構造』）と位置づけられたので、「倒幕拳兵の先駆」という評価は与えられた。

しかしこの問題意識は、1960年までの社会変革の関心を投影しすぎていた。現実の幕末政治過程が階層ごとの党派的な離合活動によってなされていないことが明らかになってみると、変革主体者の検討は意味をなさなくなった（青山忠正氏『明治維新と国家形成』）。

このような問題意識により、1980年代以後、幕末政治過程の実証が進められてみると、たとえば原口清氏は、「天誅組拳兵などに、討幕の意図や討幕の先駆的形態を見る説も古くからあったが、今日では否定されたものと見てよいであろう」、「天誅組拳兵は尊攘派がこれまで行ってきた天誅主義の大規模な暴発形態と性格づけることが妥当であり、尊攘主義の枠内のもの」と、従前の天誅組評価に否定的見解を導き出した（『幕末長州藩政治史研究に関する若干の感想』『幕末中央政局の動向』所収、初出は1998年）。天誅組はなぜ研究されるべきか、枠組みも含めてあらたな意義が問われているといえる。

3. 天誅組の再評価

戦後、『河内長野市史』の編纂に関わった時野谷勝は、同市域で新たに発掘された史料により、天誅組に参加した南河内地域の農民の動向を考察した。嫌疑を受けた参加農民への寛大な処置から、追討側に一定の支持層のあることを指摘し、弱小勢力といえる天誅組が一カ月余も吉野地域などで抗戦できた理由に結び付けている（「天誅組考」『専修史学』14号所収、1982年）。

農民参加者に注目するのは前述した1960年代以前の問題意識によると思われるが、追討側に天誅組への理解があるという指摘は改めて注目すべきである。これはたんに動員されただけの無関係の農民に限られたことでなく、天誅組首脳に対しても同様であったからである。

常陸下館出身で、主将中山忠光の小姓頭であった渋谷伊予作は、その使者として追討軍である伊勢藤堂氏の陣に赴き、捕縛される。渋谷を訊問したところその申し立てに藤堂側は動揺する。京都守護職会津侯松平容保に対して、『尊王攘夷』について身命をなげうっており、『真之乱臣賊子』ではないと思われる。ことに朝廷から攘夷実現が仰せ出されている時勢において、『皇国勇敢之士は養置』たいときであるので、彼らを一時に討ち潰してしまうというのは実に残酷である。『鎮撫』ということにして彼らをさとし、生国に帰郷させて領主などに是正させてはどうか」と意見し、天誅組につよい同情を示すのである。

4. 浪士取立と会津の強硬姿勢

なぜ藤堂氏はこれほどまでに渋谷ら浪士に期待をするのか。それは当時の浪士取立の風潮を知って初めて理解できる。

桜田門外の変や東禅寺事件など、浪士による要人・外国人襲撃の頻発に手を焼いた徳川幕僚部は、浪士清河八郎の建白をきっかけとして、文久2年末までに、来たるべき攘夷戦争の先鋒に浪士を起用すること（浪士取立）を決定する（三野行徳「幕府浪士取立計画の総合的検討」大石学編『一九世紀の政権交代と社会変動』所収）。

彼らは「浪士組」として組織され、文久3年2月、將軍家茂に先立って上洛する。が、横浜での対イギリス戦争の危機にあわせてまもなく帰東、約20名が残留を希望し許される。それに先立って、すでに入京していた京都守護職会津侯松平容保も、大坂湾を含む摂海での攘夷戦争を想定し、水戸の武田耕雲斎を主将とする浪士集団を組織、自ら率いる意志を示している。実際、それからまもなく、在京浪士藤本鉄石を本拠である洛東黒谷に招くなどして、上方浪士の組織化を計画していた。ただしこれは実現せず、前記浪士組残留者が会津所属の浪士組織となる（新選組）。

興味深いのは、これほど浪士取立に積極的であった京都守護職会津が、前述の藤堂氏らの「鎮撫」の意志を制し、天誅組討伐を強行したことである。翌年2月には、逮捕した浪士19名を早々に殺害する。戦死した天誅組総裁の一人には、会津から浪士取立の打診を受けた藤本鉄石がいたことにも注意せねばならない。会津のこの変化はどのような事情にもとづくのであろうか。このことは、同じく元治元年7月以後、守護職会津を含む「一会桑勢力」が幕末京都政局を牽引した点に鑑み、会津の対浪士（ひいては背後の長州毛利氏）政策の転換をさぐる重要な論点となろう。

第5回 平成27年10月24日

関野貞 —奈良の文化財を守った巨星—

文学部歴史文化学科 准教授 橋本 英将



1. 関野貞の略歴

関野貞（せきのただし）は1867年、越後国頸城郡高田にて、高田藩士関野峻節の次男として誕生した。第一高等中学校を経て1895年、帝国大学工科大学造家学科を卒業すると、翌1896年には古社寺保存計画調査嘱託に任じられ、1897年には奈良県技師となる。以後1901年に東京帝国大学工科大学助教授として東京に戻るまで、5年弱にわたり奈良県を中心とした関西で文化財の保存修復の指揮を執り、同時に建築史学、考古学の研究に大きな足跡をのこした。本報告は関野が奈良で過ごした5年弱の期間の活動に着目し、日本の文化財保存・研究に与えた

影響・意義について考える。

2. 廃仏毀釈と奈良の文化財

時代が明治に入り、1868年神仏分離令の発令に端を発して、廃仏毀釈の機運が全国に広まる中、奈良も例外ではなかった。多くの寺社は寺領を没収され経済的に困窮し、法隆寺では1878年に寺宝300件余りを皇室に献納するまでとなった。興福寺では僧侶全員が還俗させられ、春日大社の神官となった。荒廃した興福寺では、土堀が取り除かれ、境内の石は橋材に利用された。頭塔、子院の多くは会所、勸業所、紙漉所、県庁などに転用された。天理市内山永久寺など由緒ある寺院が廃寺となる例もあった。県知事が寺院の銘品を収奪することすらあったとされる。

こうした中次第に古来の文物に関する見直しが図られ、1871年には古器旧物保存方の太政官布告、1888年には臨時全国宝物取調局の設置などを経て、1897年（明治30年）古社寺保存法の成立をみる。これが現在の文化財保護法につながる、指定制度の始まりである。

3. 関野貞の奈良での活動—文化財の保存と修復

関野は前年における古社寺保存計画嘱託としての調査をふまえ、まさしく古社寺保存法が制定される1897年、奈良県技師として奈良に着任するのである。

奈良に赴任するとまず関野は、わずか数か月の間に、奈良県下の多数の古建築から約80棟を選び出し、年代の特定、五等級の格付け、三段階の修理の必要度を示した。『古社寺建築物保存調査復命書』（1897年6月提出）である。作業は極めて迅速で、建築物の年代特定が非常に正確であることは現在でも驚嘆すべき点である。その背景には、論文「鳳凰堂建築説」（『建築雑誌』六月号（102号）1896年）、の作成において培った能力が生かされているとされる。ここで関野は歴史家・国学者が信頼性を高く評価する史料を網羅的に参照、鳳凰堂の創建年代を特定する。また建築の分析においては、特徴のある細部を取り上げて丁寧に説明した。加えて他に比較すべき資料を豊富に挙げ、形の変化の前後関係を詳しく説明した。その際実測図を作成することで得られる詳細な数値を使用した。これにより一つ一つの部材の形までが検討項目とされ時代とともに変化していく様子が解説された。関野の古建築に対する正確な年代比定は、こうした作業に裏付けられたものである。

『古社寺建築物保存調査復命書』をふまえ、関野は新薬師寺本堂を皮切りとして次々と古社寺建造物の修理監督に乗り出してゆく。

4. 研究者としての関野貞

古社寺の保存修復に乗り出す一方で、関野は建築史、考古学の研究上の情報を蓄積し、それらの成果は関野が奈良を離れたのち、次々と発表される。なお、奈良在任中に新聞紙上に発表した小論は、棚田嘉十郎の平城宮址保存運動に強い刺激を与えることとなった。法隆寺再建非再建論争においては非再建論を主張し、また東大寺大仏の蓮座彫刻の年代の検討（「東大寺大仏蓮座彫刻の年代に就て」）、平城宮・平城京の復元的研究（『平城京及大内裏考』）、古瓦の研究（『日本古瓦文様史』）などをのちに公表した。

5. 関野貞が関連諸学に残した足跡

以上の活動を通して関野は、建築学には、建築の記述方法・解説方法、建築修理の原則、建築細部の分析視角、建築史における文献資料の重要性、などの基礎を築いた。考古学に対しては、製図学に基づいた実測図、等高線を用いた測量図などの基礎的な技術をもたらし、また軒瓦の編年研究、平城宮・京の復元的研究における嚆矢となった。

平成 27 年 8 月 21 日

柿本人麻呂 —表現と方法—

文学部国文学国語学科 教授 川島 二郎

柿本人麻呂は、七世紀末から八世紀の初期、天武・持統・文武朝において活躍したいわゆる宮廷歌人である。『萬葉集』の時代において既に、格別な歌人として遇されており、初の勅撰和歌集である『古今和歌集』においては、「歌のひじり」（仮字序）と称されている。倭歌の歴史において最も偉大な存在の一人であるということは、誰しもが認めるところであろう。その人麻呂に、つぎのような作品がある。

伊勢の国に幸す時に、京に留まれる柿本人麻呂が作る歌
 嗚呼見の浦に船乗りすらむをとめらが玉裳の裾に潮満つらむか（1 四十）
 釧着く答志の崎に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ（1 四一）
 潮騒に伊良虞の島辺漕ぐ舟に妹乗るらむか荒き島廻を（1 四二）

持統六年（六九二）三月の伊勢行幸時に、京に留まっていた折の作品である。第一首では、今の鳥羽市の海辺で船遊びをするお供の「をとめ」の、その美しい裳裾を潮が濡らす官能的な情景が歌われている。第二首では、鳥羽市沖合の答志島において、「大宮人」が風流のわざとして、海士の行為を真似て玉藻を刈る様が歌われている。第三首では、答志島のさらに東の伊良湖崎のあたりで、「妹」が激しい潮騒の中を船乗りする様が歌われている。

この三首の連作には、いくつもの意匠が凝らされている。一つは、詠まれる地が、鳥羽市の海辺から沖合の答志島、さらに東の伊良湖へと、次第に東の遠方に移って行く。また一つは、第一首では一般的な若い女性である「をとめ」を、第二首では「をとめ」をも含む「大宮人」を詠み、その上で、第三首では自身の思い人である「妹」を登場させている。つまり、第一首と第二首では「をとめ」と「大宮人」の内に思い人である「妹」を込めておき、第三首において、京から遠く思い遣っていたのは実は「妹」であったと、明かしているのである。さらに一つは、日時の推移にそって、第一首では海辺で船遊びをする「をとめ」たちへの羨望の思いが、第二首では昨日も今日も玉藻を刈って楽しんでいる「大宮人」を思っている焦燥が、第三首では荒海で船遊びをする不安の思いが、読み継がれている。



それぞれの意匠は、矛盾することなく、お互いを引き立たせるかたちで、こまやかな情景と感情の推移の上に、遠く行幸先にある「妹」が登場させられていると、理解できよう。

さらに、見るべきは、第二首の「釧着く答志」である。地名「答志」を「手節」に見なした上で、「釧」すなわち腕輪を巻く意の人麻呂創作の枕詞「釧着く」が冠されている。この枕詞は、下句の「大宮人の玉藻刈る」腕輪で飾った手元を彷彿とさせ、さらには、第一首の「をとめらが玉裳の裾」を潮が濡らす情景とも響き合い、行幸先の「をとめら」と「大宮人」へのあこがれの思いを募らせていると考えられよう。また、その思いは、第三首における、「妹」の身を不安に思う心情を裏打ちしていると、見るべきであろう。

以上、この三首の連作には、「歌のひじり」と称されるに相応しい人麻呂の丹精が込められていると、理解できよう。

第1回 平成28年9月17日

「～のだ」の表現について

文学部国文学国語学科 教授 吉田 茂晃



文末に用いられた「～のだ」が表わす内容は多岐にわたる。「の」は叙述内容を体言形式にまとめあげる準体助詞であり、「だ」はそれを再び述語形式にする（再述語化）断定の助動詞であるという根幹はかわらないのだが、叙述の体言化と再述語化という構文的手続きに担わせることのできる表現意図は多様なのである。

まず、〈換言 | 顔が引きつっているのは、緊張しているのだ。〉は、名詞述語文における主語と述語がともに文相当となったものであり、二つの事態が究極的には一致するということを表わしている。ここでは、「の」は文相当の叙述を主語・述語たらしめるために体言化するという役割を果たしていると思ないうる。

〈得心 | なるほど、座面の下が収納になってるんだ。〉と〈再認識 | そうだ、紅茶をきらしてるんだ。〉は、遭遇した事態を言語化し、自らの知識という脳内のデータベースに登録する表現である。「の」によって体言化することは、ここではデータベースに登録するためのフォーマットの役割を果たしていると言えよう。これらとは逆に、自らの知識のデータベースから知識項目を選び出して相手に示すのが〈告白 | 実はみんなに黙っていたことがあるんだ。〉、〈教示 | この店は地元ではとっても有名なんです。〉、〈強調 | 信じてくれ、オレは犯人じゃないんだ。〉のような用法である。〈得心〉〈再認識〉がインプットだとするなら、〈告白〉〈教示〉〈強調〉はアウトプットに当たる。

同じアウトプットでも、知識項目の提示ではなく希求項目を提示するのが〈決意 | オレはぜったいあいつに一泡吹かせてやるんだ。〉と〈命令 | バカだな、落ち着くんだ。〉という用法である。「の」で括ることによって単なる描写ではない希求の内容を指定することができるわけである。

以上に掲げてきた用法とは別に、「～のだ」の文が前後の文とのあいだに生じさせる表現効果もある。たとえば「加藤は車の窓を開けた。嫌な臭いがした。」という文章では、窓を開けるという事態と、その結果として生じた嫌な臭いがしたという事態との二つが表わされているが、「加藤は車の窓を開けた。嫌な臭いがしたのだ。」という文章では、窓を開けるという事態をその原因の面から見たのが嫌な臭いがしたという事態であって、結局は二つの文が一つの事態の二つの局面を示すことになっている。「～のだ」のこのような表現効果を〈捉え直し〉と呼ぶことにする。具体的な事象の背景を〈得心・再認識〉したり〈告白・教示・強調〉したりする表現である。

〈根拠づけ〉は、「～のだ」の文が、前後の文の背後の事情を述べてこれを正当化する用法である。「気をつける（命令）。ガスが漏れてるかもしれないんだ」「ちょっと休ませてくれ（依頼）。息切れがするんだ。」「嘘をつくな（禁止）。証拠は拳がってるんだ。」「コーヒー飲んでいこう（勧誘）。評判の店なんだ。」「何て書いてあるんですか（質問）。字が小さくて見えないんです。」など、相手に何かしら要求する場合の言い訳的な補足説明や、「これだけ待ってるんだ。もう帰ってくるだろう（推量）。」「この難局を乗り切ったんだ。あいつももう一人前だよ（評価）。」「やることはやったんだ。後悔はしてない（感想）。」といった、個人的な判定に対する補足説明として、その事情を〈告白・教示・強調〉する表現である。

そのほか、「なんだ、赤ん坊じゃないや（打消）。猫が鳴いてるんだ。」「早まるな（禁止）。落ち着くんだ。」のように、否定的事態に対する〈別案提示〉として機能する「～のだ」の文もある。

【講演では、「～のだった」や「～のか」の文の用法についても触れたが、紙幅の都合で省略する】

第2回 平成28年9月24日 大和の説話・伝説

文学部国文学国語学科 准教授 佐藤 愛弓



『今昔物語集』には、奈良市の元興寺を舞台とした以下のような話が載せられている。

元興寺に智光と頼光という二人の僧がいた。頼光は仏教の勉強をせず寝てばかりいたが、智光は熱心に勉強に励んでいた。そのまま頼光は亡くなり、智光は「頼光は死後どのような報いを受けているだろうか」と心配する。すると夢に頼光が現れ、浄土に生まれ変わっていると告げる。智光は「なぜ何もしていないのに、浄土に生まれることができたのか？」と頼光に尋ねた。すると頼光は「自分は生前、浄土の美しい様相を思い浮かべて静かに寝ていたのだ」と答える。智光はこれをきいて「では私はどうしたら浄土に生まれることができるのか？」と尋ねた。そこで頼光は智光を阿弥陀仏に会わせた。阿弥陀仏は智光に「浄土に生まれれば、この浄土を心に思い浮かべよ」と教える。しかし智光は「あまりに美しいので、思い浮かべることなどできない」と悲しむ。すると阿弥陀仏は小さな浄土を手の上にあらわして智光に与えた。夢から覚めた智光はその浄土の様相を絵師に描かせ、一生の間、これを見ながら浄土を思い続け、ついに浄土に生まれ変わった。その絵図は今も元興寺にあるという。

元興寺は、現在も奈良の町なかに存在し人々に親しまれているが、もとは南都七大寺の一つであり、法相教学の中心であった。いわば仏教を学ぶエリート僧たちの研鑽の場であったのである。優秀な僧は、国家的な法会で役割を果たすことが求められており、滞りなく法会が行われることが国家の運営に不可欠の事とされていた。つまり学問に身をささげた智光の生き方こそが、当時の社会が求めた学僧のあるべき姿であったのだ。

だが、この話では終始、智光は頼光に遅れをとる存在として描かれている。最初はやや上から目線で頼光を心配していたのに、その頼光がなぜ浄土にいるかわからず混乱したり、阿弥陀仏の前で「自分には浄土を思い浮かべることができない」と落胆したり……、しかし、一方で自分が間違っていると悟るや、すなおに頼光に助けを求め、阿弥陀仏には自分の力不足を告白する。ジタバタしている彼は、とてもすなおで一生懸命なのだ。

さて、学問の場としての元興寺は、貴族社会に陰りがみえる平安時代末期には衰微していった。この頃、元興寺だけでなく貴族の財力を基盤としてきた寺院の多くが変革を迫られたのである。その元興寺を支えたのが浄土信仰であり、その中心となったのが、智光が伝えたと言われる絵図、すなわち智光曼荼羅だったのだ。これによって元興寺は従来よりも幅広い階層の支持を得られるようになった。この説話の前半には、熱心に勉強する智光が、後半には一心に浄土を願う智光の姿が描かれる。それはそのまま平安末期以前の学問中心の元興寺のあり方と、それ以降の浄土信仰中心の元興寺の性質を象徴しているようにみえる。

だが智光が認めているように、浄土をありありと思い浮かべ続けることは、実際には難しい。宗教のことだけではなく、芸術でもスポーツでも、理想に近づこうとする時には、コツコツと努力を積み重ねることと、理想のイメージを自分の心底にまで浸透させることの二つ道があるのではないだろうか。そして後者は一見容易くみえるけれど、本当は難しい。頼光が生前にやり遂げたそれを、智光が「自分にはできない」と述べるように、資質にも左右されるのだろうか。この説話はその差を認めており、その差を埋める為に絵図がもたらされている。この

話は、智光より頼光が優れていることを言っているようで、本当は違う。資質もやり方も違う智光と頼光が、ともに浄土に到達できるということが大切なのである。

『今昔物語集』……十二世紀頃成立。日本最大の説話集。

『日本往生極楽記』……十世紀後半成立。往生人の伝記の集成。

『日本霊異記』……九世紀成立。善因善果、悪因悪果の説話を集める。

元興寺……奈良市芝新屋町に所在。南都七大寺の一つ。法相教学の中心として栄えたが、平安時代末期に衰微。

智光・頼光……三論宗の学僧。いずれも智蔵の弟子。

①『今昔物語集』の巻十五の一

智光……心にさとり深く、学問を好む。

頼光……なまけて学問をせず、寝てばかりいた。

だが、先に往生できたのは頼光のほうであった。智光は「頼光は何もしていなかったではないか」と驚く。

学の智光（具足戒あり）→ △

行の頼光（具足戒なし）→ ○

観想……精神を統一し、静かに仏の姿や浄土のありさまなどを思い浮かべること

口称念仏……仏・菩薩の名を唱えること。

②『日本往生極楽記』

『今昔物語集』が典拠とした資料。

ただし「頼光はなまけて学問をせず、寝てばかりいた」とはされない。

③『日本霊異記』

智光……智恵第一。経典の注釈を記し学生たちに読み教えた。

行基……仏法をひろめ、迷える者を救済した。

智光は行基に嫉妬し、その罪で地獄に行って責め苦を受け、改心する。

「行基は具足戒を受けていないではないか」

学の智光（具足戒あり）→ △

慈悲の行基（具足戒なし）→ ○

④参考『今昔物語集』巻二十の十二

行はあるけれど、学のない僧侶が、偽の往生に遭遇する。

行（おそらく具足戒なし）→ ×

学 → ○ ?

第3回 平成28年10月1日

『源氏物語』と音楽

文学部国文学国語学科 教授 仁尾 雅信



『源氏物語』には音楽に関する記述が200箇所以上見られ、平安朝物語としては特出している。それは、量だけの問題ではなく、質的にも他の物語を凌駕している。紫式部はその音楽を様々なかたちで物語の中に活かしているが、今回は、主人公光源氏の栄枯盛衰を語る、物語展開の手段として使われている音楽、という視点から論じた。

「紅葉賀」巻で光源氏は、「源氏の中将は、青海波をぞ舞ひたまひける」と青海波を舞った。父帝桐壺帝が一院のお住まいである朱雀院に行幸されることになり、帝は身重（実は源氏の子を身ごもっている）の藤壺がその催しを御覧になれないのを不憫に思われ、試楽をおさせになった。「青海波」は二人舞で、光源氏は頭中将と対になって舞った。源氏の艶やかな舞姿に帝は「涙をのごひ」、周りの者も感泣した。一方、頭中将は「花のかたはらの深山木」と評された。この場合「花」は勿論光源氏である。『源氏物語』は二人を対比する構造で物語が展開されているが、その対比を、青海波の舞楽で表し、二人の将来を暗示している。また、この後光源氏の華麗な舞姿を間近に見た藤壺の複雑な心中が述べられていて、音楽を手段として二人の心の裏が語られている。

この時の様子は、折に触れ後の場面造型に使われる。第一部の最後の巻「藤裏葉」にも顔を出す。「朱雀院の紅葉の賀、例の古事思し出でらる。（中略）主の院、菊を折らせたまひて、青海波のをりをを思し出づ」とある。今は亡き藤壺との間に生まれた不倫の皇子が冷泉帝として即位し、そのため史実にはない准太上天皇となった光源氏を「主の院」という。明石の姫君の入内も決まり、神が四季を支配するように四季の町を配し造営した六条院に、冷泉帝が朱雀院とともに行幸されたのである。光源氏はこの栄華の極みとも言える行幸で、「紅葉賀」で舞った「青海波」を想起している。光源氏の栄華の極みを音楽でも表出している。この行幸の宴で、源氏の栄華への道すがらを描いた第一部は幕を閉じる。

次の「若菜」になると、朱雀院の娘女三宮が降嫁する事件が生じる。光源氏は院の五十の御賀を計画する。当初は正月を予定したが、降嫁の心労から紫の上が発病し、紫の上が二条院に移った間隙をぬって柏木が女三宮と密通事件を起こし、宮の懐妊などのためさらに延期を余儀なくされた。総音楽監督と目され、このような賀宴に不可欠の人材柏木は、この不義のため、試楽にはかろうじて参加したが、本番ではその病のため不参加となってしまった。歳末の二十五日にやっと挙行了した御賀であるが、肝心の女三宮も不参となり、作者はその辺の諸事情を、前もって行われた試楽のことは記すが、本番は「次々にとどこほりつることだにあるを」と述べるだけで、賀宴の様子を片鱗だに語らない。女三宮を寵愛していることを示し、院との御仲を修復向上しようという光源氏の当初の目途は完全に外れてしまった。時間と人をコントロール出来る力を誇示していた光源氏にとって、悲惨極まりない結果となってしまった。時間と人を支配する力が減衰したことを作者は音楽で表している。それ以降源氏の住む六条院からは音楽が消えたようになり、光源氏の出家が暗示される「幻」（第二部の最終巻）には書かれてよさそうな場面にさえ音楽が書かれていない。さらに、光源氏のいない第三部になると音楽が物語から消え去る。

以上のように、帝王学の不可欠の要素である音楽は、光源氏の盛衰を語るシンボルでもあり、それはまた同時に、物語を展開させる一つの手段でもある。

第1回 平成28年10月8日

江戸時代の奈良町と名産

文学部歴史文化学科 教授 谷山 正道

はじめに

「江戸時代の奈良町は、どのような性格を帯びた都市であり、そのあり方にはどのような変化が生じるようになったのか」という問題について、奈良晒をはじめとする当地の名産の盛衰や、観光都市化という側面に光をあてながら、話しました。

その骨子を以下に記しておきます。



1 江戸時代の奈良町の性格

○ 絵図に見える奈良町の様子

- ※ 「御奉行所」、「春日社」「東大寺」「興福寺」「元興寺」をはじめとする寺社、数多くの「丁」の存在。
- ※ 安永7年(1778)「和州南都之図」には、「八景」「陵墓」「名所并名木」「土産」も記載され、天保15年(1844)「和州奈良之図」には、「南都七大寺」「八景」や主要な年中行事・鹿も記載されている。
- ※ 元禄11年(1698)の調査によれば、奈良町の範囲は、北は奈良坂京口から南は櫛口までの1里4町50間、東は市ノ井から西は西三条口までの26町44間余で、惣町数は205町、惣人口は3万5369人(うち町方人口は2万6420人)となっていた。

○ 政治都市

- ※ 奈良奉行所の存在・・・慶長18年(1613)に中坊秀政を「南都奉行」に起用、奉行所の開設、与力・同心の設置、財政的保障(奈良廻り8か村)、奈良町の支配、17世紀後半には大和一国の行政・裁判をとり行う幕府の地方行政機関として確立。
- ※ 奈良代官所も一時存在・・・寛文4年(1664)から元文2年(1737)まで、大和国内の幕領を支配。

○ 宗教都市

- ※ 豊臣政権の寺社政策・・・興福寺をはじめとする寺社権門の俗権を削ぎ落とし、政教分離をはかって、近世的な寺社に衣替えさせようとする(→「寺社王国」の終焉)。
- ※ 徳川政権による由緒ある寺社に対する財政的基盤の保障(朱印地の付与)と宗教活動の展開(年中行事化)。

○ 産業都市

- ※ 大和国内での商取引の中心地、遠隔地取引の拠点(豊臣政権下での苦況を乗り越える)。
- ※ 製造業・・・寺院から町方の産業へ(酒造や製墨など)。
- ※ 延享5年(1748)『奈良曝布古今俚諺集』(村井古道)の記載・・・「慶長年前までは、奈良の町屋今のごとき町並に非ず、工商家居奈良七郷とて、各農民或は興福寺、元興寺、東大寺、春日社の奴婢、被官、又は寺侍、役人等の住居にして、工商の家は、甲冑細工人、奈良刀、或は酒家、墨師等多くして、生布、晒布、青苧、粕糴の商家は、希々ならではなかりしと也、(中略)兎角当代流布の曝布は、慶長・寛永年中より織屋商売人さかんになりし也」。

○ 観光都市

- ※ 名所案内記や絵図・・・17世紀の半ば以降に続々と刊行(観光都市化の進行と平行)。

2 奈良町の名産の盛衰

○ 地誌に記された名産

- ※ 元禄15年(1702)『南都名所記』の記載・・・「ぐそく(具足)」「さらし(晒)」「ゆえんすみ(油煙墨)」「さけ(酒)」「もんじゅ四郎小がたな(文殊四郎小刀)」「まんぢう(饅頭)」「西大寺ほうしんたん(豊心丹)」「うちは(団扇)」「ほっけ寺つちいぬ(法華寺土犬)」「右の外めいぶつおほし(名物多し)」。
- ※ 享保21年(1736)『大和志』の記載・・・「曆本」「甲冑」「刀剣」「踏鎧(あぶみ)」「漂布(さらし)」「団扇(うちは)」「酒」「糟瓜(ならづけ)」「饅頭」「藺履」「木綿鞆(もめんたび)」「法論豆醬(ほろみそ)」「豉油(いろり)」「豆腐」。

○ 主要な名産の盛衰

- ※ 奈良晒・・・高級麻織物(武士や町人の礼服などに使用)、青苧を東北地方より購入し「苧かせ」・織布をして晒加工を行う、幕府による保護もあり生産が大きく進展し「南都随一」の産業に、最盛期(17世紀中頃から18世紀初めにかけて)の年産額は30~40万疋(60~80万反)、「当町中十の物九つは布一色にて渡世仕り候、妻子は布かせぎ致し、下々の駕籠かき日用取り申す者共の女には、布おらせ或は苧うみ渡世仕り候」(玉井定時『楊麻止名勝志』)、「奈良晒、麻の最上といふは南都也」(享保17年〔1732〕『万金産業袋』)、他国における布生産の進展などの影響により享保期を境に衰退に向かうようになった。
- ※ 奈良酒・・・濁酒から諸白造りへ、僧坊酒から町方での造酒への転換(安土桃山時代)、轟く名声＝「和州南都造酒第一トナス、而シテ摂州之伊丹、鴻池、池田、富田之二次グ」(元禄8年〔1695〕『本朝食鑑』)、酒屋数・酒造高の減少＝「古の酒株は奈良中に壺万六千石程御座候間、酒屋百拾軒余御座候得共、ぜんぜん減少仕、只今は酒屋六拾軒程ニ罷成、酒もわずかに六千石ならでは造り申さず候」(元禄11年〔1698〕の奈良町惣酒屋口上書)、他国における酒造業の進展がその主な原因、なお「奈良漬」や「霰(あられ)酒」(酒のなかに米麴を浮かせ味醂酒の一種)も当地の名産。
- ※ 奈良墨・・・松煙墨から油煙墨へ(室町時代)、寺院抱えの墨師から町方の墨屋への製造の担い手の移行(安土桃山時代)、墨の需要が高まる17世紀の後半以降に製造が進展、18世紀初頭には38軒の墨屋が存在(うち3軒は幕府にも墨を納める「御墨屋」)、18世紀には古梅園の松井元泰が墨の研究と改良に心血を注ぎ『古梅園墨譜』『古梅園墨談』を著す、墨屋数は文化14年〔1817〕の墨屋組合結成時には57軒、その後幕末にかけて減少傾向を示すようになったが製造はそう大きく後退することなく明治維新を迎えた。
- ※ 武具(具足や刀剣など)・・・江戸初期までは盛んに製造され、将軍の御用具足師となった岩井与左衛門のような名手も存在していたが、その後、平和な時代の到来により、(小刀をのぞいて)製造は衰退するに至った。

○ 幕末期奈良奉行所による特産物の調査

- ※ 安政3年(1857)の「奈良町」および大和国「在方」の各特産物の販売額が判明。
- ※ 「奈良町」の第1位は「奈良晒縞布類」(販売高14万4325反、代銀3771貫893匁余)、第2位は「油煙墨」(販売高5546籠、代銀1203貫803匁余)、第3位は「酒」(販売高5646石余、代銀660貫415匁余)で、「下駄草履皮沓類」「奈良刀打物類」「筆」「奈良綿入足袋類」「鑄物鍋釜類」「奈良団扇」「膠」がこれに続く。

3 観光の名所となった奈良

○ 旅の盛行と遊覧のスポットとなった奈良

- ※ 数多くの由緒ある寺社や名所旧跡の存在・・・「当地之儀者旧都之儀ニ付、神社仏閣旧跡等有之、殊西国より伊勢参宮之道筋ニ有之候間、当表参詣旁諸国より相応ニ入込人も有之」（天保15年〔1844〕「(京都所司代酒井忠義宛奈良奉行池田頼方伺書)」)。
- ※ 名所案内記や絵図の刊行・・・寛文6年(1666)「和州南都之図」、延宝3年(1675)『南都名所集』、同6年(1678)『奈良名所八重桜』をはじめ、17世紀の半ば以降に続々と刊行。大坂や京都の書肆のほか、「南都大仏前 絵図屋庄八」や「陰陽町 山村重三郎」らも活動。
- ※ 名所案内人の活動・・・元禄5年(1692)の大仏開眼供養時にはその存在が確認され、嘉永元年(1848)には「七十人余」を数えた。猿沢池と春日社・東大寺・興福寺を半日で案内するのが基本パターン。
- ※ 旅籠屋・土産物屋の繁昌・・・旅籠屋は樽井・今御門・押上・今小路町に存在(『奈良曝』)。

○ 東大寺大仏修復・大仏殿再建事業の展開と奈良町

- ※ 露座の大仏と公慶上人・・・貞享元年(1684)から勸進活動を開始。
- ※ 勸進による大仏修復の実現・・・元禄5年(1692)に開眼供養。
- ※ 幕府のサポートによる大仏殿再建の成就・・・宝永6年(1709)に落慶供養。※ 奈良町への経済効果・・・「大仏殿再建記」の記載など。

おわりに

奈良町は、東大寺の大仏の修復と大仏殿の再建事業が成就した頃、大きな転換期を迎えるようになっていました。それまで当地の経済を支えていた産業(武具に続いて奈良酒、さらには「南都随一」の産業となっていた奈良晒の生産までも)が、衰退傾向を示すようになったのです。その一方で、旅の盛行に伴って当地を訪れる人々が増加するようになり、観光都市奈良の礎が形成されるとともに、観光が当地の経済を支える重要な産業の一つとなるに至った点が注目されます。

第 2 回 平成 28 年 10 月 15 日

鹿の角切り始まる！

附属おやさと研究所 教授 幡鎌 一弘



「奈良のシカ」は、平成 28 年、奈良公園内でおおよそ 1,500 頭ほど生息している（鹿苑保護数を含む）。野犬などの天敵が消え、日本全国で増えすぎた鹿は、一般的には害獣扱いされているが、「奈良のシカ」は昭和 32 年に史跡名勝天然記念物（天然記念物）の指定を受けた文化財で、たいへん恵まれた特殊な存在である。しかし、あまり知られていないが、獣害という点では奈良公園周辺でもまったく同じ状況にあり、農業被害があるだけでなく、世界遺産の春日山原生林をも荒らしているという。

本年 3 月、奈良県は長年の方針を見直し、保護する地域、捕獲を可能にする地域、その中間地域というおおよそ 3 段階に区

分けて、あらたな対策を講じることにした。

この対策は実質的に江戸時代の状況に近いと、私は思う。江戸時代には、厳密な保護地域は奈良町であり周囲には鹿垣があった。若草山などの東側の藤堂藩領は、奈良奉行所や興福寺の力が及ばず、「野鹿」として扱われていた（捕獲されていた）。奈良町の南北の地域、川上村や白毫寺村といった幕領がグレーゾーンで、鹿殺しの問題がしばしば発生した地域だが、実際には密猟は黙認されていたと思われる。

奈良の鹿は、春日社の創建神話の中で語られ、「神鹿」という宗教的象徴であることが強調されているが、実質的にそのようになったのは鎌倉時代のことである。その後、中世の奈良では神鹿殺害人は死罪とされたものの、近世にはその実態はほぼなくなった。それに反して、神鹿殺害人の処刑は一種の悲劇として、新たな都市伝説となって語り継がれた。

これまで私たちは、実態と言説とを混同し、鹿と人間の関係を見誤ってきたように思う。両者の関係の歴史化は、これから進むべき道を考える上での基本作業だろう。

現在まで奈良に鹿が残っていたのは、春日社や興福寺の信仰の力ではなく、松永久秀以来、織田政権（柴田勝家・明智光秀）、豊臣政権、徳川政権が、曲がりなりにも鹿の保護を認めたからである。それは、奈良における興福寺の警察権や行政権が奪われていく過程そのものである。わずかに残ったのが、統一政権の全国支配とはおよそ無縁の鹿の保護だけだった。さらに割り切っていえば、徳川家康がそれまでの政策を引き継がず、鹿の保護をうたわなかったら、事態は大きく変わっていただろう。江戸時代の鹿をめぐるのは、中世以来の伝統と家康の祖法の二つが混じったものになっていた。もちろん、幕府（奈良奉行）にとって大きな意味を持つのは後者である。

17 世紀後半、家康時代のままでは幕政は立ち行かなくなり、畿内の行政組織も見直され、そこに勤める幕臣（官僚）の資質も問われ始めた。一方奈良町は、酒造・晒・観光によって人口が増えて町場が拡大し、景観は大きく変わった。

このころ奈良奉行に任ぜられた溝口信勝によって、本格的な都市政策が始まった。具体的には、家職取調（住人把握）、非人頭設置（治安対策）、薪能鞍懸売買権の貧困民への付与（都市下層対策）である。そして、秋になると気の荒くなった牡鹿の角が危険なため、住人・旅行者の安全対策として行われたのが鹿の角切りなのである。

こうして始まった鹿の角切りも、やがて観光行事化していく。いつどのようにして、人びとの娯楽化したかはまだ明らかにはなっていないが、奈良の秋の風物詩となった。明治維新以後、鹿を守る言説として神鹿がもちだされ

る一方、角切りは奈良観光の目玉の一つであり続けた。なにより、「奈良のシカ」は奈良になくてはならない究極のゆるキャラで、奈良の人びとにとって鹿との共存は避けて通れない。私たちは歴史に学び、知恵を絞り、新たな道を模索しなければならないのである。

【参考文献】

奈良公園史編集委員会編 1982『奈良公園史』、奈良県。

奈良の鹿愛護会監修 2010『奈良の鹿：「鹿の国」の初めての本』、京阪奈情報教育出版。

幡鎌一弘 2014『寺社史料と近世社会』、法蔵館。

幡鎌一弘 2012「鹿の角切りと奈良の町」、『研究紀要』17、奈良県立同和問題関係資料センター。

第3回 平成28年10月22日

ぜんぶ、茶粥のせい

文学部歴史文化学科 講師 黒岩 康博



昭和初期の食生活を記録したという『日本の食生活全集 29 聞き書奈良の食事』（1992年）は、その冒頭に「国のまほろば 大和の 古きゆかしき 食と味」という詞とともに、茶粥を炊く写真を掲げている。俗に「大和の茶粥、京の白かゆ、河内のどろ食い」と呼ばれた茶粥（食）は、西日本・畿内近国（特に奈良・和歌山県）に現在も残る食習慣であるが、大正期以降は長らく「体育上、教育上」の問題とされたという。このギャップについて、主に奈良県を舞台として展開された、茶粥を取り巻く言説から考えてみることにする。

まず明治・大正期の奈良県の食生活を見てみると、明治13年（1880）9月の調査「人民常食類比例」によれば、奈良県は米65%、麦33%と共に全国平均（米53%、麦27%、雑穀14%）より高い米・麦の比率を示している。大正7年（1918）の「主食物調査」では、奈良県は「米飯・麦飯ガ常食、芋粥・小豆粥モ食ウ」（市部・市街地郡部）「朝夕粥ヲ食シ、飯ハ昼ノミ。粥ハ芋・小豆ヲ混入ス」（村落部）と、全域で粥食が見られるが、そのことへの評価が特筆されていた訳ではなかった（奈良県では、茶粥もただの「オカイサン」と呼ぶことが多い）。

おそらく最初に奈良県において茶粥に関心を持ち、問題視したのは教育界であると思われる。大正9年奈良県師範学校教諭の高田十郎が行った習俗調査では、朝夕（多いところでは昼も）に食される茶粥は「コノ地方ノ生活趣味ノ中心」であり、おかずを作るのは昼食の時だけとされている。翌年の雑誌『奈良県教育』に載せられた「常食慣例状況調」でも、殊に吉野郡を中心とする山間部では茶粥が食事の主軸となっていたことが明らかにされており、そうした状況を受けて開かれた同年の奈良県女教員大会では、家庭生活の改善策として、「食物に関する欠陥の矯正」の項目で「粥全廃すること」が提案されている。

昭和に入り、昭和5・6年（1930・31）度に郷土研究施設費が師範学校に交付され、各地の師範学校に郷土室が設置されて郷土教育運動が始まると、現在の「総合学習」を彷彿とさせる「総合郷土研究」の中で郷土料理（山梨県のほうとうなど）の評価も高まっていったが、茶粥への逆風は止まなかった。同11年の教育努力点、翌12年の教育是の1つとして、県は「体位の向上」を掲げ、栄養食の奨励や学校給食の導入を検討しているが、その過程で低体位の原因は明らかでないとしながらも、「お粥に起因するか、栄養摂取の無関心にあるか」と、茶粥を中心とした粥食が元凶であるかのようにほのめかしている。

これら2つの県の教育方針のうち、特に12年の教育是では低体位は「県民性」とされ、その犯人探しが企図されたため、「元来、大和から偉人が出ないと言うが、或いわお粥腹の加減かも知れない」（宮武正道『奈良茶粥』、昭和7年）といった俗説をも生む原因となった。このようにして、現在も継続する奈良県の茶粥という食習慣をめぐっては、大正期に教育者により課題・問題が見出され、昭和戦前期の郷土教育運動の高まりを背景に、「郷土食」と「県民性」との因果関係が特にマイナス面において想起されるようになり、はては「大和に偉人なし」は茶粥のせいであるという、安易な俗論が生まれることとなった。戦時中は「節米メニュー」として間違っただけの持ち上げられ方をすることもあった（実際には米よりもおかずの節約につながる）が、これらの紆余曲折を経た茶粥の現在は、今も常食とする一部の地域・世代を除いては、「美味」という看板を売りにした「郷土食」という名の嗜好品という位置に落ち着いているように見える。さて茶粥の未来はどのようなものになるであろうか。こうした来し方を踏まえつつ見届けて行きたいものである。

第1回 平成28年6月4日

スペイン語とポルトガル語を通して見る日本語

国際学部外国語学科 教授 矢持善和、
准教授 野中モニカ、講師 J. ロペス



(1) 日本とポルトガルの出会い

矢持善和

まず、日本とポルトガルの出会いのきっかけとなった歴史的人物はマルコ・ポーロであり、彼は「東方見聞録」の中で日本を紹介した。

ジパングの王の宮殿は純金で出来ており、真珠が大量に産出される富んだ国、更にはモンゴルの君主フビライが日本を征服のために大群を派遣したが、暴風に遭遇し大敗したと記載されている。また、日本人は魔法の石を腕の中に入れていたか、捕虜が身代金を払えない場合、友人・親戚を招いて捕虜を料理

して食べこれ以上美味しい肉はないと語り合うなどと書かれている。

次にザビエルとヤジロウの出会いがある。

1543年(天文12年)3名のポルトガル商人が中国人のジャンク船で種子島に到着した。その後1546年、ジョルジェ・アルバレスが日本人の逃亡者ヤジロウとその従者2名を乗船させ、1547年にヤジロウはマラッカに滞在するフランシスコ・ザビエルと対面したが、ザビエルはその後ヤジロウ等をインドのゴアに送り教義と言語の勉強をさせた。

ローマ法王への書簡では、「日本人、特にヤジロウは知識欲旺盛で、道徳的に気高く、才能も豊かであり、8か月もしないうちにポルトガル語で話し、書き読みも覚えた」と書かれている。薩摩藩、池端弥次郎重尚は領主弥寝氏の分家で貿易に携わっていた。また、デウスを「大日」と訳していることから、真言宗に属していた事が分かる。そして、イエズス会創設者の一人であるザビエルはヤジロウの案内によって1549年に来日する。

フロイス等の宣教師は織田信長の寵愛を受け、岐阜城、安土城を度々訪れている。

しかし、当時のポルトガル王ジョアン三世からローマ法王に送られた書簡には「ジパングは火薬一樽と交換に50人の奴隷(女性、当時は雌と書かれていた)を差し出すのだから、神の御名において、領有する事が出来たら、献納額を増すことが出来るでしょう」と書かれていたが、秀吉は1589年、秀吉のバテレン追放令を發布し、1597年フロイスが死去する。

信長の当時、メンデス・ピント「東洋放浪記」によれば、鹿児島から田浦、日向、博多、阿久根、等の港には100隻のジャンク船、当時の中国から2000隻の商船が停泊していた。

(2) ブラジルと日本の中で生まれたミックス言語 ～コロニア語とデカセギ語～

野中モニカ

日本人のブラジル移住は1908年に開始し、ブラジルは現在世界最大の日系人コミュニティ（現地でコロニアと呼ばれる）に成長しています。そのコミュニティでは日常語としてポルトガル語が日本語にミックスされた「コロニア語」が発達しました。例えば、「カーザした（結婚した）」や「トマ・バーニョしなさい（お風呂に入りなさい）」など、単なることばの借用に止まらない使い方がなされています。しかし、コミュニティ内で発達したため、コロニア語はネイティブのポルトガル語話者にも日本語話者にも理解できない特徴を持っています。今では世代が代わるごとに日本語が継承されなくなっているため、コロニア語は危機に瀕しています。

ブラジル人の来日（当初は「出稼ぎ」と呼ばれる）は1990年の入管法改正で激増し、日本各地でブラジル人コミュニティが形成されました。そこでは、日常語として日本語がポルトガル語にミックスされた「デカセギ語」が発達しています。Estou tsukaretado（私は疲れている）やgambatear（頑張る）など、ことばの活用が見られる「デカセギ語」もブラジル人コミュニティでは通じますが、ネイティブの日本語話者・ポルトガル語話者には通じません。今後の世代交代で日本育ちの子ども達は日本語をメインとして使用するため、デカセギ語も消滅の危機にさらされるでしょう。

コロニア語とデカセギ語はそれぞれポルトガル語でも日本語でもないミックス言語です。単なる乱れた言語ではなく、言語発展の形として捉えるならば、その研究も今後の重要な課題です。

(3) スペイン語から見た日本語

ロペス・パンス ファン・ホセ

スペイン語にはポルトガル語と同様に日本語を語源にした外来語が多くみられる。特に日本の伝統文化に関連する言葉が多い。逆に、スペイン語を語源とする外来語は日本語にも多くみられる。では、この二つの言語、二つの文化はどのように影響をし合い、お互いにどのようなイメージを持つのだろうか。

スペインの言語事情と比較してみると日本語の新たな一面が見られる。1978年のスペイン王国憲法の第三条では：

「第1節 スペイン語は全国の公用語である。全国民はそれを知る義務があり、使う権利がある。

第2節 スペインの他の言語も各州で公用語とする

第3節 スペインの多言語性は文化遺産であり、尊敬・保護すべきである」

つまり、スペイン語を共通語としながらスペインは多言語国家である。歴史的に考えてもスペイン王国は近代に複数の王国の合体によってできた近代国家でそれぞれの言語・文化が尊重されてきた。

しかし、フランコ政権の下にスペイン語以外の言語はスペイン語の「DIALECTO」とされ、その使用が禁じられた。「DIALECTO」は日本語で「方言」と訳すことが多いがその根本的な意味が異なっている。スペイン語では「DIALECTO」はある主言語から派生したものである。しかし、カタロニア語やガリシア語はスペイン語から派生したのではなく、ラテン語から派生している。日本語の「方言」は特定の地方で話される言葉を指す。こういった意味では関西弁が「標準語」から派生していなくても「方言」と呼べる。

スペイン語から見て「日本語」は一つの言語より日本列島で使用される複数の言語の総称である。

第2回 平成28年6月11日

平成蘭学事始 ―ことばを通して見えてくるオランダ社会―

国際学部言語教育研究センター 准教授 小林 早百合



「蘭学」とは、江戸中期から幕末にかけて日本で
行われたオランダ語学習と、オランダ語を介した西
欧諸科学、技術及び西欧事情の研究とその知識を指
します。日本が鎖国をしていた歴史の一時代、オラ
ンダ語という小さな言語の窓を通して、辞書にも不
自由しながら、当時の最先端の科学技術や学問を夢
中で学び、伝えた人々がいました。『蘭学事始』の筆
者として知られる杉田玄白もその一人です。しかし、
蘭学はペリー来航、続く開国とともに日本から姿を
消し、第二次世界大戦の終わりにはオランダ語学習

も歴史の中の一ページになってしまいました。

蘭学が日本から消えて久しい平成の今日、私たちにはもうオランダ語を通して学ぶことはないのでしょうか。本講座「平成蘭学事始」は、現在の日本ではその国名を知らない人はいないものの、地理的な位置も言語も、国の事情もほとんど知る人のいないオランダを、もう一度、オランダ語という一つの窓を通して見る機会を提供することを試みたものです。そしてその出発点として、そもそも日本で蘭学がいかんにして生まれ、いかんにして消えていったのかを歴史の大きな流れの中で振り返り、さらに日本人がオランダ語を捨て（！）英語を選ぶに至る、歴史のまさに転換点に生きた人物として、福沢諭吉に焦点を当てました。

現在のオランダは日本の九州ほどの国土面積を持つヨーロッパの小国です。国の公用語はオランダ語のみですが、英語・ドイツ語と言語的距離が近いこともあり、母語しか話せない人は国民のわずか6%、反対に母語以外に3言語話せる人が37%（EU平均10%）にのぼります。また国籍から見れば、オランダに居住する外国人人口は全人口の4.5%に過ぎませんが、行政で使用されるオランダ独自の「allochtonen（直訳すれば「外来人」に最も近く、本人の出生地に関わらず、両親のどちらかがオランダ生まれではない人）」というカテゴリーがあり、人口の20%以上がこれに相当します。日本から見れば不思議にも思えますが、前女王、現国王、王妃、王女と、現在のオランダ王室メンバー全員がallochtonenです。

もともと冬が長く寒いヨーロッパの北に位置し、土地にも資源に恵まれない海洋通商国家であったオランダは、長年、いわば移民の「輸出国」でした。ところが1960年代、第二次世界大戦後の経済復興による労働力不足に際し、経済復興の遅れた地中海沿岸国からの労働移民の「輸入国」に転じます。1970年代からは南ヨーロッパ諸国出身の移民が帰国し、代わってモロッコ、トルコからの移民が主流となり、労働移民導入当初の予測に反し、オランダ定住化と第二、第三世代の誕生が続きました。現在もEU加盟国として域内の住人の流入や難民の受け入れでallochtonen人口は増えています。こうした国内のallochtonen人口に対するオランダ市民教育の根幹をなすのが、「第二言語としてのオランダ語教育」であり、対外的な国家戦略の根幹をなすのが、「多様で高度な能力を育てる外国語教育」です。多言語を話す能力と寛容を国是としてきたオランダでは、移民に対するオランダ語教育の必要性が意識されることが希薄でしたが、アメリカの同時多発テロ以降、その重要性が広く認識、強調されるようになりました。また、オランダの憲法に規定された「教育の自由」がその存在を保証し、公立学校と同様の支援金を政府が負担し、国内共通のカリキュラム以外に学校独自の宗教教育を行うキリスト教系の私立学校と並んでイスラム教系の初等・中等教育学校が1980年代から全国に存在していますが、国際情勢を反映し、近年この「イスラム学校」に向けられる視線も厳しさを増しています。

高齢化する福祉社会、労働者不足、経済のグローバル化とネット社会の成立、多様な言語・文化背景を持つ人口の流入と定住化など日蘭両社会が共通に抱える課題はたくさんあります。オランダ語という窓を通して現代のオランダが私たちに見せてくれるものが、今回の講座に参加してくださった皆様にとっての「蘭学事始」となれば幸いです。

第 4 回 平成 28 年 6 月 25 日

世界に広がる中国語 — 「漢語橋」 世界大学生中国語コンテストを事例として—

国際学部外国語学科 講師 今井 淳雄



近年、中国語の学習者数が世界的に増加している。中国政府公認の中国語資格である漢語水平考試（HSK）の日本語ウェブサイトによると、世界の中国語の学習者数は、4000 万人に達し、日本でも 200 万人を超えるという¹。このような世界規模での中国語学習者数の増加の背景について玉置充子は、「中国語の経済的価値が高まったことに加えて、それを影響力を拡大するためのソフトパワーとして積極的に活用しようという中国の国家戦略がある²」と指摘している。

特に胡錦濤政権以降、中国政府は「中国語」を重要なソフトパワーの 1 つに位置づけ、それらソフトパワーを用いた諸外国の中国に対するイメージの向上を目的とする外交、すなわち「パブリック・ディプロマシー」（Public Diplomacy）を重視した外交を積極的に展開している。その典型的な例に「孔子学院」（孔子学堂を含む）があげられる。孔子学院は、2004 年に国家対外漢語教学領導小組弁公室、現在の国家漢語国際普及推広領導小組弁公室（以下、国家漢弁）によって設立された中国語の教育機関である³。2015 年 12 月 1 日現在、全世界 134 の国・地域には、500 か所の孔子学院と 1000 か所の孔子学堂が設立されている⁴。孔子学院を設立した国家漢弁は、孔子学院の設立・運営以外にもソフトパワーとしての「中国語」を用いた関連プロジェクトを多数展開している。その 1 つが「漢語橋」世界大学生中国語コンテスト（以下、漢語橋）である。漢語橋は、2002 年に「国家対外漢語教学領導小組」の主催⁵によって開催された世界の大学生を対象とした中国語の世界大会であり⁶、2016 年で第 15 回目を迎える。

この漢語橋には、日本の大学からも第 1 回大会から出場者がおり、過去数回において優秀な成績を収めてきた。そのなかでも天理大学国際学部外国語学科中国語専攻（以下、中国語専攻）では、2007 年から出場者を出し、2009 年には世界大会で一等賞、13 年には世界大会で三等賞を輩出している⁷。それでは、中国語専攻は、この漢語橋にいかなる理由で参加し、大学の中国語教育のなかに位置づけてきたのだろうか。そもそも中国語専攻には、戦前の天理外国語学校の時代から中国語スピーチコンテスト（以下、コンテスト）に出場してきた歴史があり、今日に至るまで優秀な成績を収めてきた⁸。特に 2006 年以降、コンテスト入賞を目指すための教育システムの構築が行われ、実践されてきた⁹。このようなシステム構築の結果、近年では、中華学校で中国語を学んできた者、中華圏での留学経験を有する者や両親もしくはいずれかの母語が中国語の者が入学するケースが増加している。しかし、上記のような中国語既習者は、一般的に日本の団体が主催するコンテストには参加できないことが多く、学習成果を披露する場が確保できない等の問題があった。そこで中国語専攻では、中国語既習者でも参加可能な漢語橋への参加を促進することになった。以上のように、現在の中国語専攻の教育システムは、コンテスト出場を目的に構築されているため、漢語橋は中国語専攻にとって欠くことのできないものとなっている。一方で、漢語橋にとっても参加資格を上記のような中国語既習者にまで広げることで、より中国語力の高い参加者を集めることにつながり、コンテストそのものの質と権威の向上につながっているものと思われる。

注

1 「ビジネス・就職に必須」漢語水平考試ウェブサイト、<http://www.hskj.jp/about/business/>、2016 年 6 月 15 日検索。

2 玉置充子「中国の対外中国語教育：『漢弁』と孔子学院」『海外事情』平成 22 年 3 月号、2010 年、122 頁より引用。

3 玉置充子「中国の対外中国語教育：『漢弁』と孔子学院」『海外事情』平成 22 年 3 月号、2010 年、123-125 頁を参照。

- 4 「関与孔子学院 / 課堂」孔子学院総部 /
国家漢弁ウェブサイト、http://www.hanban.edu.cn/confuciousinstitutes/node_10961.htm、2016年6月13日検索。
- 5 実施・運営は承弁単位である「国家対外漢語教学領導小組弁公室」が担った。
- 6 国家対外漢語教学領導小組弁公室編著『漢語橋第一屆世界大学生中文比賽』国家対外漢語教学領導小組弁公室
(出版年不明)、i頁を参照。
- 7 2007、2009年当時は、国際文化学部アジア学科中国語コース。2010年4月より国際学部外国語学科中国語専攻に
改組。
- 8 天理大学五十年誌編纂委員会『天理大学五十年誌』天理大学、1975年、313を参照。
- 9 中川裕三「具体的目標を掲げた言語教育—中国語スピーチコンテスト入賞を目指した事例」『外国語教育—理論と
実践』第42号、2016年、53頁を参照。

平成 28 年 7 月 29 日

「動機づけ」を高めるための実践的な英語指導法について考える

国際学部言語教育研究センター 准教授 櫛本 崇恵



1. はじめに

英語学習において、学習者の動機づけが学習場面での成功や失敗を決定づける重要な要因の一つであり、それゆえに、教員にとって動機づけを高める技術の向上が肝要であることに疑いの余地はない。本講座の

前半でまず、ドルニエイ（2012）が考案した言語学習動機づけのプロセス・モデルである「過程志向アプローチ（process-oriented approach）」に焦点を当て、効果的な動機づけ理論について概観した。講座の後半では、教員の草の根的な努力と実践事例を踏まえながら、動機づけの技術を高めるための英語指導法について検討するとともに、参加者同士でこれまでに学習者の意欲を喚起するために講じてきた様々な手法について共有し合った。

2. ドルニエイが開発した「過程志向アプローチ」

英語教育は、教育改革の必要性を訴える声が大きくなるにつれて、世論の厳しい批判を受け、改革を強く求められてきた最たる教育分野の一つである。小学校レベルでの英語教育導入が推進されている中で、個々の英語教員におけるコミュニケーション能力の向上を目指した実践も推し進められている。

ただ、このようなマイクロ/マクロレベルでの改革において成功を遂げるには、学習者自身の英語学習に対する興味や意欲、いわゆる動機づけが重要となってくる。どんなに指導法が優れていても、動機づけが不十分であれば、教育成果は期待できない。教授法理論も大切であるが、今、英語教員に求められている資質は、学習者のモチベーションを上げ、それを維持する具体的なストラテジーを習得し実践する能力である。従来より、英語教員なら誰しも動機づけの必要性を強く感じており、学習者のモチベーションを喚起するために多様な方策を打ってきた。しかし、ドルニエイはなぜ人（学習者）が何か（英語学習）をやろうと決定するのか、どのくらい熱心に取り組むのか、どのくらいの期間その活動に意欲的に取り組むことができるのか、という3つの問いに答えることに成功した包括的な動機づけ理論は一つもないと主張する。Maslow（1987）が提唱する「欲求階層」にも見られるように、人間の行動は非常に複雑であり、広範囲にわたる数多くの要因の影響を受けているからである。

さらにドルニエイ（2012）は、学校の教室は生徒たちが生活の中のかかなりの時間を過ごす「複雑な小宇宙」と述べている。教室は学習者たちにとって学びの場であると同時に、彼（女）ら自身が「自律的学習者」（金谷、2014）に成長する場でもある。教室内では非常に多くのことが同時進行しており、ただ一つの動機づけ理論がこの複雑な環境をうまく説明できるとは言い難い（ドルニエイ、2012）。したがって、学習者たちの行動理由を解明するには、一つの流儀に従うのではなく多様な観点を説明できる折衷的な概念が必要である。

そこで、ドルニエイ（Dörnyei, 2001; ドルニエイ、2012）が開発した言語学習動機づけのプロセス・モデルである「過程志向アプローチ」（process-oriented approach）に注目する。このアプローチは、動機づけを動的（dynamic）なものとして据えており、「時間の経過による動機づけの変化」を明らかにしようとするものである。英語教員は、学習者たちが語学習得のような長期に渡る学習活動を行っている場合、動機づけが長期間持続可能であるとは捉えていない。むしろ、学習者の動機づけは、学習者が参加する種々の活動など多岐に渡る要因によって影響を受けており、常にアップダウンを経ながら変動する。

そこで、教室内で英語学習を促進する過程志向的なストラテジーとして、ドルニエイ（2012）は以下の項目を挙げている。

- ・ 動機づけのための基礎的な環境を作り出す
- ・ 学習開始時に動機づけを喚起する
- ・ 動機づけを維持し保護する
- ・ 肯定的な追観自己評価を促進する

本講座では、このストラテジーの段階的かつ時間軸に沿った動機づけの手法について、参加者とともに議論した。さらに、英語学習者を動機づけるのに必要なことは何か、また英語学習者への動機づけを高める指導とはどのようなものかについて、すでに授業で取り入れているストラテジーの成功例・失敗例を含めて語ってもらい、各参加者の実践経験について意見交換を行った。

3. おわりに

動機づけ重視の指導実践を目指すために、自分の動機づけの技術を開発する際に大切なのは、選ぶストラテジーの質であり量ではない。ドルニエイ（2012）が提唱するように、全てのストラテジーを同時に実践しようとするよりも、自分自身の指導法と学習者グループに適した少数のストラテジーを選択し段階的な手法をとる方が、英語教員にとってより効果的であることを参加者同士で確認し合い、本講座を終了した。

参考文献

- 金谷 憲（2014）『英語授業ハンドブック』大修館書店
ドルニエイ、ゾルタン（2012）『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』大修館書店
Dörnyei, Z. (2001) . Teaching and Researching Motivation. Harlow: Longman.
Maslow, A. H. (1987) . Motivation and Personality (3rd ed.) . New York: Harper and Row.

【一般社会人のためのスポーツ実技講座】「バドミントン 初中級編」

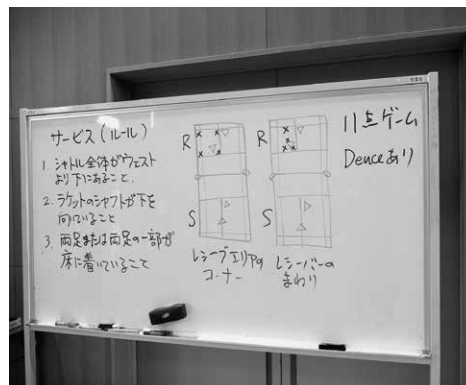
体育学部体育学科 教授 中谷 敏昭

事前申し込み要 [先着順 30名]

受講料：3,000円 (シャトル代・保険料の実費) 会場：天理大学体育学部キャンパス 総合体育館 (サブアリーナ)
バドミントンはラケットとシャトルを用いて何回打ち続けられるか、試合で腕試しをするなど、たくさんの魅力があります。講座では、ストロークの基本となる運動を理解してけがなく楽しめる内容を用意しました。

平成27年度

- 第1回 10月17日 (土)
『ストロークの基本を学ぼう!』
- 第2回 10月24日 (土)
『力強いストロークのための運動を覚えよう!』
- 第3回 11月7日 (土)
『巧みなストロークを打てるようにしよう!』
- 第4回 11月14日 (土)
『ゲームを理解してやってみよう!』
- 第5回 11月28日 (土)
『ダブルスゲームに必要な技術を覚えよう!』
- 第6回 12月12日 (土)
『ダブルスのフォーメーションを覚えよう!』
- 第7回 12月19日 (土)
『ダブルスゲームを楽しもう!』



平成28年度

- 第1回 9月18日 (日)
『ストロークの基本を学ぼう!』
- 第2回 10月8日 (土)
『力強いストロークのための運動を覚えよう!』
- 第3回 10月16日 (日)
『巧みなストロークを打てるようにしよう!』
- 第4回 10月30日 (日)
『ゲームを理解してやってみよう!』
- 第5回 11月12日 (土)
『ダブルスゲームに必要な技術を覚えよう!』
- 第6回 11月20日 (日)
『ダブルスのフォーメーションを覚えよう!』
- 第7回 12月3日 (土)
『ダブルスゲームを楽しもう!』



天理大学公開講座

第9号

(2015年度／2016年度)

2017年12月発行

編集発行 天理大学広報委員会

天理大学入試広報部

印刷 天理時報社

天理大学広報委員会・天理大学入試広報部